

平成18年度文部科学省科学技術振興整備

女性研究者支援モデル育成事業「研究者養成のための男女平等プラン」成果2006-2

研究者養成のための男女平等プランに関する調査(2)

大学院生の現状と支援ニーズ調査報告書

(聞き取り調査編)

2007年5月

早稲田大学

女性研究者支援総合研究所

目 次

1 章 調査概要	1
2 章 聞き取り内容と主要な語り	3
1. 生活環境について	
2. 大学院での研究環境について	
3. 進路・ライフプランについて	
4. 支援について	
5. 男女共同参画に向けての意見・要望	
3 章 課題の考察 大学院生の研究者像の形成と不安	27
1. 研究のやりがい・研究者アイデンティティの形成	
2. 「研究者」の意味するところ	
3. 理系分野における研究のあり方と課題	
4. 不安定さと保証	
終章 提言	50
1. 学内施設の整備	
2. 相談室に求める役割と機能	
3. (相談の一形態としての)交流会の実施	
4. 出産・育児における制度の整備	
5. 育児支援に求められるもの	
6. ジェンダーに関する意識の向上と意識改革	

凡 例

1. ケースの属性は「ID」「課程と学年」「年齢」「性別（男性のみ）」その他必要に応じて「助手」の身分も記した。また、省略した場合もある。
2. 各ケースのIDはA～Wをランダムに割り振った。
3. インフォーマントの発言については、引用箇所を抜粋して本人に発言内容を確認してもらい、引用についての承諾を得て掲載した。
4. 明らかに個人が特定される可能性がある場合については、記述を抽象化した箇所がある。
5. インフォーマントの語りの中で調査者の発話部分は[]でくくって示した。

はじめに

平成 18 年度文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業プログラム「研究者養成のための男女平等プラン」は、早稲田大学が機関としての女性研究者比率上昇の具体的達成目標をかかげた上で、男女共同参画推進室を設置し、継続的に若手研究者を育成・支援し、女性研究者が働きやすい環境を整備することを目的とした事業である。今年度は、本事業推進にあたっての喫緊の課題である基礎的データの収集から着手した。具体的には、女性研究支援総合研究所内に調査ワーキング・グループをもうけ、大学院生、助手、教員を対象に現状とニーズに関する調査を実施している。2006 年 12 月には、本学大学院生全員を対象とした全数調査「研究者養成のための男女平等プランに関する調査(1)大学院生の現状と支援ニーズ調査」を実施した(2007 年 3 月に報告書として公表)。そこから、本学大学院生は、非常に高い研究意欲をもっているものの、日常的な研究生活ではいくつもの困難や悩みを抱えていることが明確になった。とりわけ、今後の進路に関する悩みは深刻なものであり、その内容は、研究者としてのキャリアを開始する時期が、結婚や親なりといった個人のライフコース上でのライフイベント経験と共時することと関連していた。研究者として生きることは、結婚し親になるという「あたりまえのこと」の経験を躊躇させる場合すらあり、とりわけ女性にその確率が高く、同時にそのことは、男性にとっても大きな負担を強いることも確認された。そして、本学大学院生が家事や育児と研究との両立を支援する具体策を、男女とも強く大学に求めていることが明らかとなった。

この全数調査内容をふまえて、2007 年 3 月からインテンシブな聞き取り調査を実施したところ、修士課程・博士課程大学院生など 22 名が応じてくれた。ここでは、大学院生の研究・学習活動における阻害要因を探るべく、「生活環境」「大学院での研究環境」「進路・ライフプラン」「必要な支援」「男女共同参画・支援室に関する要望や意見」を中心に現状ならびにこれまでの経験を語ってもらった。回答内容は、本報告書 2 章に詳述したとおりである。なお、今回の聞き取り調査は 22 名という少数からの意見聴取であったが、全数調査結果を踏まえたうえで考察するには、妥当な質的情報と判断した。調査ワーキング・グループではこれらの語りから、大学院生は「研究のやりがい」をどのように考え、そして「研究者アイデンティティがどのように確立しているのか」、大学院生は「研究者」をどのようにとらえているのか、研究生活に抱えている不安と生活保障とは具体的にどういう内容なのか、について考察を加えた。その成果は 3 章のとおりである。これらの考察から、大学院生とりわけ女性大学院生が「子どもをもつこと」と「研究生活をおくること」との両立において、「安定した職をもつことなくしては、正当性を確信できない」と考えている点が浮き彫りになった。「保育所に預けてまで大学院を続けてよいのだろうか」という思いが、すでに子どもをもって

いる者ばかりでなく、これから経験するであろう者たちのなかでも強く共有されていた。さらに、「子どもをもつかどうかは、自分が決めた(る)こと、選択した(する)こと」であって、パートナーとの共同性・連帯の意識は、驚くほど脆弱であった。終章では、全数調査ならびに本調査の結果をふまえて、「女性研究者総合サポートセンター(仮称)」のあり方についての提言を具体的に 学内施設、相談室、交流会、出産・育児における制度、育児支援体制、ジェンダーに関する意識と意識改革、の6項目として整理した。女性支援総合研究所では、現在、本報告書での考察・提言内容をふまえて、サポートセンター・ワーキング・グループを中心に具体的施策の策定を進めている。

なお、今回の聴き取り調査は半構造化形式で実施したが、その中心は大学院生がいだいている不安や心配をさぐることにあつた。そのため、早急な解決が必要なほど深刻な問題を抱えていることが明らかになるケースもあった。そうしたケースに対しては可能な範囲でのサポートの提供を行った。視点をかえるならば、今回の聴き取り調査自体が相談の場としての機能を担っていたといえる。あらためていうまでもないが、全数調査の結果にあるように、大学院生が悩みを語れる場、相談できる場を確保することは、本学における喫緊の課題のひとつである。

本調査は調査ワーキング・グループで実施したが、聞き取り調査は笹野悦子と小村由香が行い、各章の執筆は章末記名のとおりである。

最後に、年度末の多忙な時期に長時間にわたる調査へ協力いただいた大学院生の方々に心から感謝いたしますとともに、皆様の今後の研究生活がますます充実しますことを祈念いたします。

2007年5月18日

早稲田大学女性研究者支援総合研究所
調査ワーキング・グループ

嶋崎尚子(文学学術院・教授)

荻野佳代子(本研究所・客員准教授)

笹野悦子(本研究所・客員講師)

小村由香(文学研究科博士課程)

第1章 調査概要

調査時期：2007年3月1日～4月18日

調査対象：全数調査実施時に呼びかけた聞き取り調査に応募した69名の中から15名が実際に調査に応じた。そのほかに呼びかけに対して5名が応募した。また、当研究所の客員教員2名に対しても聞き取り調査を実施した（合計22名）。

属性：

年齢・性別

	N	20代	30代	40歳以上
男性	2	2	0	0
女性	20	6	10	4

所属研究科

研究科	
政治学研究科	3
経済学研究科	0
法学研究科	2
文学研究科	5
商学研究科	0
理工学研究科	2
教育学研究科	4
社会科学研究科	2
人間科学研究科	1
スポーツ科学研究科	1
合計	20

学年

学年	
修士	6
博士1-3年	8
博士4-6年	4
科目履修生等	2
合計	20

資格・身分

助手	5
リサーチ・アシスタント(RA)	1
学術振興会特別研究員	0
客員教員	2

調査方法：質的インタビュー

2例は対象者が2人でグループインタビューを実施したが、それ以外は対象者と調査者が一対一で実施した。調査場所は早稲田大学 41-31 号館会議室、対象者の了解を得て IC レコーダーで録音した。

調査内容：半構造化インタビューであらかじめ5項目を準備し、それらについて自由に話してもらった。「生活環境」「大学院での研究環境」「進路・ライフプラン」「必要な支援」「男女共同参画・支援室に関する要望や意見」。

付記

インフォーマントの発言については、引用箇所を抜粋して本人に発言内容を確認してもらい、引用についての承諾を得た。

第2章 聞き取り内容と主要な語り

本章では聞き取り調査で用意した質問に沿って、回答を取りまとめる。本調査は、これに先立って実施した全数調査「研究者養成のための男女平等プランに関する調査 (1) 大学院生の現状と支援ニーズ調査」¹の調査結果から浮かび上がった大学院生像、すなわち非常に高い研究意欲をもっていながら、研究生活において十分に能力発揮ができていないと感じている大学院生像に焦点を当て、能力発揮の阻害要因を探ることを課題のひとつとしている。本章では「生活環境」「大学院での研究環境」「進路・ライフプラン」「必要な支援」「男女共同参画・支援室に関する要望や意見」の5項目についてインフォーマントに自由に話してもらった内容から、それぞれの問題点を抽出することを目的とした。

2-1. 生活環境について

(1) 収入の獲得手段

経済的に困難を感じていないと語ったのは、企業に20年間勤務した後、大学院へ進学したケースだけで、ほとんどは家族(親・配偶者)の支援、アルバイト、奨学金、正規雇用の仕事で生活資金や学費を得ていると語られた。

アルバイトをする場合は、図書館でのアルバイトや授業補助(TA)、研究補助(RA)、研究資料の作成など、少しでも自分の研究と関連のある仕事を選択し、収入を主に学費や研究費に充当していた。助手やCOEプログラムのRAなどの期限付きの仕事では、それが終わった後の職の保障がないことへの不安が語られた。奨学金や助手の給料は貯蓄に回して将来に備えていると語られた例もあった。他方で、研究資金の獲得のために、飲食店での接客や塾の講師をしている例もみられた。

RAは期間限定なので終了後は蓄えを使うことになり、それを見越してPD申請を通らなければならないと思っている(G博士1-3年・20代・男)。

今はお金に困っていないが助手は任期制なので今後のために貯金する(Q博士4-6年・20代)。

お金が足りなくなると、日雇いでドラッグストアのサンプル配布やお蕎麦屋さんのウェイトーをやったりもした。調査に行くための費用(海外調査のために必要な30万円の費用)が必要だったので、奨学金(給付)を取った後は、アルバイト(研究所での情報入力アルバイト、時給970円)は週1で勉強をかねての仕事で済んでいて、全く

¹ 2006年12月 - 2007年1月実施。

違った。ほんとに良かったです（K 修士・20代）。

奨学金の問題も大きい。日本学生支援機構に給付奨学金がなくなったため、奨学金の利用は膨大な借金を背負うことを意味する。将来の生活の安定が保障されない以上、奨学金を借りながら働いて借金返済に充て、精神的にも不安定な日々を送ることが語られている。給付奨学金を獲得した例では「自分は恵まれている」と感謝の気持ちが表されており、これは周囲の大学院生の経済状況が厳しいことを暗に物語っている。

「気がついたら600万円の借金」。日本学生支援機構の奨学金は結婚していると配偶者収入も本人収入とみなす。そのために自分は有利子の奨学金しか取れなかった。博士課程に入ってようやく無利子の枠が取れたが、気がつくと600万円のくらいの借金を抱えている状態だった。このことも自分にとっては精神的な不安定要素で、助手になるまで、学費分だけ稼げれば良いという気にはなれなかった。子どもが小学校に入るまでには何とか借金のめどだけは立てておかなければという思いがあった。学費分と（奨学金の）借金の返済に充てていた。このお金のことが精神的に一番きつかった。助手になって第二子が生まれるまでの間に借金の返済の準備に専念していて、それがやっと落ち着いたときにやっとはじめてゆったりしたというか、落ち着いて身の回りのことを考えられるようになってきた。日育の配偶者の収入が換算されるという制度は改められるべきだと思うし、逆に支援してもいいと思う。子どもを持った時点で結婚していようがいまいがその人は保護者として家計の主体者になるのだから、そこをもうちょっと汲み取った制度を作ってあげるべきだと思う。（T 博士 4-6年・30代）

(2) 仕事（アルバイト）と研究の時間配分

自分の特技を活かして、時間的に融通の利く仕事ができる人も見られたが、仕事と研究との両立は時間的な制約も多く、その両立には肉体的・精神的な困難を伴っていることがわかる。

塾講師などは大変忙しくて普段のゼミの準備にも支障が出てしまう。収入はいいらしいが、時間数を減らそうとすると別の人を雇うといわれたりするので、収入を確保しようとするすると研究する時間がないという話を友人から聞く。自分は塾講師はしていない。（G 博士 1-3年・20代）

助手の仕事で忙しい時期もあるので、年間を通してみると仕事と研究の時間は半々くらい。ただ、その日に多少時間があってもすぐに研究のモードに移行できない。ず

っと助手の仕事している期間と、仕事を忘れて研究に没頭している時期との差が激しい。(Q 博士 4-6 年・20 代・助手)

正規雇用で仕事をしているが、研究時間の確保が困難。ただ、研究職である程度仕事のやり方に裁量があり、また仕事と研究分野が近いので恵まれている。(L 博士 1-3 年・30 代)

フリーランスの仕事をしているので都合のいい時間に働くことができ負担はない。今は会社に雇用されているが、博士課程に入ったら条件のいい会社に移るか、起業することも考えている。(R 修士・20 代)

自分の研究ともかかわりのある NPO で仕事をしてきた。勉強をないがしろにして働くとも年収 100 万円くらいにはなるが、研究に力を入れると月に 2~3 万、よくて 5 万くらい。(T 博士 4-6 年・30 代)

家族と同居している場合は親や配偶者から生活費の支援を受けているケースが多く、研究を継続するうえで家族による支援の大きさが浮き彫りになった。他方で、年齢相応に自立したいという気持ちと研究を犠牲にしたくないという気持ちの板ばさみになる悩みも語られた。

親元にいるので生活費はかからないがそれでも年間 120 万くらいは必要で、去年はバイトのために十分な勉強時間が確保できなかった。(S 科目等履修生 30 代)

自分の同年輩の知人たちはみな働いていたのでちょっと劣等感も感じていて、なるべく自分のお金は自分で稼ぎたいなあという気持ちもあった。アルバイトをする時間に研究が遅れてしまうというのがあってあまりアルバイトができなくて、去年からやっていたアルバイトも時間がとられてしまうのでどっちつかずの生活になっていたように思う。(P 博士課程 1-3 年・20 代)

(3) 家庭生活や育児と研究の両立

仕事と家事・育児と研究の両立は、研究時間の確保、体力の消耗という点でかなりハードであるとともに、研究意欲の低下や研究継続への懷疑や不安に関する悩みを訴えるなど精神的にもハードである。

目下の悩みは、子どもがうまれて研究のパワーが落ちたというか、モチベーションが

上がらないこと。集中力がなくなってきた。研究は子どもを保育園に預けてまで自分がやるべきことなのか、やりたいことなのか、わからない。産休中も周囲にいろいろ迷惑をかけたし、これからも何かプロジェクトをやるにしても、就職活動をするにしても、子どもがいて、何があるかわからないから、自分からすすんで手をあげられない。働く自信がなくなってきた。(H 博士課程 1-3 年・30 代・助手)

研究者としての悩みでは、博士論文を書き上げる段階にあり、それについて悩んでいる。その悩みを複雑にしているのが、子どもが生まれたばかりだということ。子どもがまだかなり小さいので、自分ができることが、他人に任せられる部分よりも多いので、時間の確保が難しい。それが一番難しい。本当に書き上げる段階で、ふつうなら徹夜をしてもやらなくちゃいけない段階なのに、徹夜はできない。ぎりぎりになって書き上げる段階がちゃんと乗り切れるのか、それが一番の悩み。(E 博士課程 4-6 年・30 代・助手)

研究そのものが子どもを保育園に預けてまですべきことなのかどうかという悩みが複数語られた。この悩みは自分自身のジレンマであるとともに、学生という立場で保育園に子どもを預けている例も少ないため悩みを共有できない、あるいは認可保育園の場合、入所基準において学生という立場は保育要件が低いとみなされるように社会的な承認が得られていないことも、その苦悩を深くしている。

自分の中でもものすごい葛藤はあった。特に保育園に預け始めてからが強いんですよ。みんな仕事している中で自分は大学にいているということはとても言えない、それがとても辛かった。去年から大学勤めをしているということが言えるようになった。今はしてるけれども実はそれまでは就学の枠で入っていたんだって、今は言えるけれども、就学だけのときは、自分は大学に行っているけれども保育園に預けるとはとても言えない。怖いですよ、言えなかったし、自分の中でも凄い葛藤はあるし。いいのかって。ちっちゃければちっちゃいほど。大きくなってくると保育園が彼にとって必要な場っていうのがはっきりしてくるのでね、お友達と遊ぶとかあるので。1 歳、2 歳くらいまでは精神的に嫌でしたね。勉強がはかどらないときなんかしんどくて、気分転換でもしてみればって言われても、なかなかそういう気にもなれないし、かといって今日は進まないっていうとなんか鬱々と座ってるだけっていう、ああ、今日も一日終わっちゃったっていう、そういうときが一番しんどい。(T 博士 4-6 年・30 代・助手)

子どもを預けてまで自分がやるべきことなのか、やりたいことなのか、わからない。(H 博士 1-3 年・30 代・助手)

次の語りからも推測できるように、育児と研究の両立にあたっては家族の支援が重要な意味を持っていることがわかる。しかし E さん本人の語りにもあるように、家族の支援を得ることが難しい場合、各自治体や国といった公的機関が提供するサービスや支援の活用が欠かせないだろう。

電車の混みぐあいなどを考えると、大学の保育園につれて来ることは現実的じゃないと思っている。なんとなく家の近くで祖父母がみてくれる幸運な状況にいますので、それを選んでます。私はラッキーだから勉強が続けられている。自分の実家は名古屋なので、夫の実家のそばに引っ越した。・・・それに助手という仕事をしているという建前があるので協力してくれている。・・・実家が東京じゃないご夫婦の場合が一番大変なんだろうと思う。(E 博士 4-6 年・30 代・助手)

2-2. 大学院での研究環境について

(1) 施設・設備面について

キャンパス内での院生の研究の場については多くのインフォーマントが問題にした。院生室・研究室の有無やあり方は研究科や専攻によってかなり事情が異なっていた。院生のデスクや使用できる PC が完備している場合は満足していると語られたが、研究科によっては、机はもとより院生の居場所さえなく、院生が学内で研究する場所もないことが訴えられた。早急な設置が求められている。

<満足>

早稲田はいい。院生の自習室もパソコン、個人ロッカーもあり、研究環境が素晴らしい。(博士課程 1-3 年・50 代)

研究そのものが高度な設備や施設を使うというものではなかったので、不自由を感じたことはなかった。院生一人につき大きな机が 1 台ずつ使えるようになっている。今年は新生が多かったので、修士の院生は 2 人で 1 台を共有していたが、ドクターの人は一人一つ使っていた。引出しなんかも好きなように使えている。(博士 1-3 年・20 代)

<不満>

院生の数が多いので、研究室で研究する、あるいは自分のデスクで研究するという環境に関しては、他の国立大学が修士の時点から机が与えられている等と比較して整っていないと思う。(G 博士 1-3 年・20 代・男)

自分の研究は自宅ですることになるが、(フルタイムで仕事をしているので)自宅に戻ると疲れており緊張も切れてなかなか集中できない。せめて大学に出た機会に院生室が使えるれば、効率よく研究を進めることもできるのではないかと思うが、9 時で閉室し、日曜日でも使用できない。(L 博士 1-3 年・30 代)

大学で勉強する場所がない。自分は家にいると家事をしてしまうなど他にすることが多くて集中できない。保育園に子供を出して大学に行って、そこで研究もしてそのあと子供とともに帰宅するというリズムのある研究生活を送りたかった。他研究科には院生専用の部屋とパソコン室があって、そこと図書館を活用して論文を書くことができた。現在の所属研究科ではパソコン室も学部生と共用で本を広げるスペースもない。院生が大学で研究する場所というのは必要だと強く思う。(T 博士 4-6 年・30 代)

また、図書館の開館時間の短さも問題視された。図書館に関しては、学籍がなくなると学友としての利用しかできず、研究に支障をきたすという意見も出た。

わりと研究環境に満足しているので、欲を言えば図書館が 24 時間開いてほしいというくらいです。(K 修士・20 代)

研究科の読書室では大学図書館にもない文献が所蔵されていて利用価値が高いが、5 時に閉室するのでかなり不便である。(G 博士 1-3 年・20 代・男)

学籍を抜いた後でも年間いくらか決めてもらっていいから、図書館を使えるようにして欲しい。(Q 博士課程 4-6 年・20 代・助手)

(2) 研究指導について

適切かつ十分な研究指導を受けられているという意見がある一方で、研究テーマが違うため内容について十分な指導を受けられない、大学の制度として指導教員を選ばず教員とテーマが整合しない、病気や定年等で次々と指導教員が入れ替わり安定した指導が受けられないことへの不満や不安を語る人もいた。

<満足>

院生のやりたいことをやりたいようにやらせてくれる点が気に入っている。(B 修士・20代、K 修士・20代)

風通しがよく、叩けば開かれるという適切な指導を受けている。(O 修士・40代)

投稿雑誌、論文の指導も適切に受けている。(P 博士1-3年・20代)

尊敬できる教員で満足している。(L 博士1-3年・30代)

また、出産という不安を前にして後押ししてくれたなど教員の指導や支援に満足している人もいた。

女性の助手は少ないし、在職中に出産する助手は珍しいらしい。そのような女性の先生も少ないようだ。助手になるときにびくびくした。ちょうど子どもができたとわかったときに助手の採用が決まったので、いいのかなぁと思った。背中を押すという役割では、指導教授の影響がすごく大きくて、助手になることが決まったときに妊娠がわかったが、指導教授は「それでも堂々と産休をとればよい」と言ってくれた。それで結構安心した。(E 博士4-6年・30代・助手)

産休を取得した間は他の助手に仕事を割り振って分担してもらった。最初は仕事の分担を他の助手に自分で依頼するよう言われたが、学年主任が「それはあなたの仕事ではない」といって、主任が仕事を割り振りしてくれた。自分では頼みづらいし、自分で頼んでいたら、ついついそれは自分でやると言ってしまったかもしれない。(H 博士1-3年・30代・助手)

<不満>

研究指導については様々な問題や不満が挙げられた。まず教員の指導力や教員とのマッチング、指導体制そのものにたいする不満や疑問が投げかけられた。

[研究指導に関して満足は]してないですね。正直、全くしてないですね。先生の指導は各先生の個性によるものだとお話を踏まえてお話しするのだけど、修士課程で在籍した他研究科ではベテランの先生だった上に、研究論文、研究者を育てようという意思の強い先生だった。それを見てしまったゆえに、自分の今の先生に対する不満が大きい。十分な論文指導やゼミが機能していないと思う。学部の延長であれば

許されても、お金と時間を割いてきている大学院生にそれはないんじゃないかなという思いは今もある。そういうことを相談できる人はいない。同じ不満を持っている人に相談を受けるが、それを解決する糸口はないと思う。大学のヒエラルキーの中で、いったん教授という地位に就かれた方が自分の至らなさをお知りになる機会というのはほとんどないと思う。また、その先生にもの申す立場の人もないので、周りで学生が不満を言っている、先生の耳に入ることは一生ないのだろうなあと思う。(T 博士 4-6 年・30 代)

自分はたまたまうまくいったが、入試のときに志望教員を聞かないのは制度として不備。(Q 博士課程 4-6 年・20 代・助手)

すごく先生の入替わりが激しくて、定年や病気などで指導教員が何度か代わり、現在も今年までという約束で非常勤の先生にみてもらっている。博論提出の手続き等について事務所に質問に行ったが、前例がないのか、漠然とした感じ。ほぼ絶望的な感じ。今月で満期退学。学籍を抜いた後は、誰も指導してくれないんじゃないか。(W 博士課程 4-6 年・30 代)

また、男性の指導教員の意識について意見が挙げられた。セクシュアル・ハラスメントを意識しすぎていて関係がぎこちなくなる場合、逆に当事者意識に欠ける場合があった。

研究室は女性のほうが多いが先生は男性なので、先生のほうが気後れして困っておられるようだ。小さな用事を頼むのもセクハラになるのではないかとと言われて、そういう事が重なると居心地が悪くなる。(R 修士・20 代)

上記 T さんが指摘しているように、学生、院生が教員の指導に不満を持っていても、その教員に「物申す人がいない」という権力関係が変わらない限り問題解決が図れないという状況は珍しいものではない。なかには教員が威圧的で深刻な状態に陥っているケースもあった。

自分の研究領域からいうと他の先生の指導を受けたいのだが、縁がある今の先生が権力を持っていて自分のところに来るようにと強くいわれた。指導を受けたい先生にひょっとしたら迷惑をかけてしまうかもしれないと思うと、自分の希望を通せない。

研究指導がほとんどなされないで、今後研究がちゃんとやれるかどうか不安。研究指導の時間は文献の輪読をしていて、ゼミ形式で自分の研究を報告して先生から指導を受けたり院生相互で批評したりという機会はない。去年は修士論文も院生で面倒

を見ていたので、みんなあまり先生に期待していないと思う。

事務仕事を押し付けられて断りにくい状況で、今後の研究がうまく進めていけるかどうか不安。研究室の中の女性、その中でも自分に仕事を回してくるので時間的な面からも不安。今のところは週に1日7~8時間だが、今後どのようになるかわからない。最初は週に数日仕事をするようにと言われた。そのときはすぐには断れずいったん引き受けたが、後日週に1日にしてほしいと断りを言いに行ったところ、大きな声で威圧的に非難された。仕事を断ってしまうと「じゃあここに入ってこなくていいんだね」と進学を拒否されるような気もしている。同じ研究室の先輩たちにも相談しており、辛さはわかってくれて励ましてもらうが、みんな自分に降りかかってくるのを恐れているのか、先生との話し合いの場を持つというようなこともない。この先いろいろと仕事を押し付けられるのではないかという心配は、指導を受けている院生全員が持っている。男性の院生も事務仕事をさせられているが、お茶をいれたりお菓子を買ってきたりする仕事は女性の仕事だという認識があるのではないか。

他の教員や大学の友人にも相談をし、ハラスメント委員会に相談した方がいいのではないかとアドバイスをもらい、相談した方がいいのかどうか、迷っている。学内のハラスメント委員会なので、何かの拍子に先生に伝わってしまうのではないかという不安もある。周囲の人からは博士課程に進学しなくても、自分で研究して論文を書いて論文博士という手段もあるといわれたこともある。(30代・女)

このケースは早急な解決が望まれるが、視点をかえると、この聞き取り調査そのものがいわば相談の場になっている。院生調査(1)で相談ニーズの大きさが明らかになったように、院生が悩みを語れる場、相談できる場の確保が喫緊の課題となっているといえるだろう。

(3) 研究室の雰囲気について

研究室に関する悩みでは研究を遂行する上での積極的な議論が出来ない不満が複数例あった。また、研究室で女子がたった一人という場合の問題も指摘された。男子学生からも、特別な問題は発生していない場合でも、女性が一人だけという圧迫感は察して余りあるという意見が述べられた。また、深刻なケースとしては、研究室の男子院生全体による一人の女子院生に対するいじめに近い処遇で抑うつ状態に陥り将来の進路変更まで考えているケースも相談された。そこまで深刻な問題にはいたらなくても、女性であるがゆえに、数の上で圧倒的に勝る男性の抑圧に打ち勝つべく「なめられないように」、男性に倍加する努力が必要だと語られている例もあった。

<満足>

差別もない。とてもよかった。みんなで助け合いながら、オープンな感じで何でも

話せた。卒業するけど、先生がいらっしゃいという。いったん卒業するともう一度戻ろうとしても先生が退職なさったりして、行くところがない。今のところは卒業してもフツーのような感じをつくっている。Z先生は、「Zゼミは卒業しても終わりではない。これからも一緒にやりましょう」という感じをつくってくださっている。ここには1年しかいられないけど、卒業生もなんらかのかたちで先生に関与できる。こういう卒業後のフォローが大事。(M 修士課程・40代)

(修士は他大学院にいたが) 雰囲気も施設も早稲田のほうがよい。ジェンダーによって不利なこともない。老若男女バランスよく在籍。むしろ女性の力が強い。いい子たちばかり。(C 博士課程 1-3年・50代)

指導教授も理解があるし、参加しているプロジェクト研究所のX教授(女性)もいい人。X先生は、子育てと研究を両立している研究者は少ないので、大事だと言ってくれる。(F 博士課程 1-3年・30代)

< 不満 >

研究室で学徒としての議論をする雰囲気ができていないという意見が複数上がった。「仲よし」の雰囲気が壊れることを恐れて真剣な議論を牽制するケースや、ゼミが議論の場として成立しないという深刻なケースもあった。

真摯な議論ができない。一番ショックだったのは活発に議論を戦わせることを避ける雰囲気だった。みんな仲良しみたいな気風が強く、議論があまり盛り上がりがない部分に不満を感じる時もある。女性が多いので、女子校的な「女競争²」の雰囲気が強く感じられるときもあり、居心地が悪くなる時もある。(R 修士・20代)

ばらばらな感じ。集まる機会もないし、研究の話をする機会もない。ゼミで自分の研究を報告することもないので、自主ゼミを作ろうといていたが結局立ち消えになってしまった。みんな先生に仕事を振られるのを恐れてあまり大学に寄り付かなくなっている。自分を守るのに精一杯だと思う。(30代・女)

就職していない先輩とともに研究することは、ある意味では就職先が少ないことをつねに自覚させられ、焦燥感を感じることもなるようだ。

² Rさんによれば、「どんなに勉強や活動ができて、お料理など『女性的なこと』ができれば評価が低い(周囲から妙な雰囲気を感じる)。料理ができると評価が高くなる。また、先を争ってお茶をいれたり、する」という。

あまり就職先が開かれていない学問領域なので、先輩たちが未就職のまま残っている。それを身近に見ていると焦燥感や不安を感じる。自分が研究している領域では非常勤も非常に少ないので、あまり就職先が開かれていない。(G 博士 1-3 年・20 代・男)

研究室の中ではハラメントやそれに近い関係が生じていることも報告された。仲間からの性的な嫌がらせや、先輩たちの「そんなことも知らないのか」という言葉や無言の圧力、のけ者にしたり失敗をあげつらうなどのいじめに遭っている深刻なケースもあった。

この半年で 2 回もセクハラを経験し、不快な思いをした。身近な関係であるが故に問題化しにくいという問題がある。(J 科目履修生・30 代)

女性の大学院生はとても少ない。元々この領域を研究している女性研究者が少ないので、比率として少ないかどうかはわからないが、現在は研究室には一人のみ。女性の少なさ、具体的な抑圧があるわけではなく、女性の先達が少ないために男性的な学問と思われているということが背景にあるかもしれない。男性ばかりの職場・研究環境では女性にはかなり圧迫感があると思う。(G 博士 1-3 年・20 代・男)

修士課程終了で就職した同級生は、男性特有の現代思想やメタな議論が大好き、というような独特な環境になじめない。なんだそんなことも知らないのかといわれたり無言の圧力が耐えがたく、そのような環境に身を置いてやっていく根性も覚悟もないという理由で就職していく。自分は研究者になりたいという確固たる気持ちがあるので、男性の議論にもまけないぞという気概で研究を続ける。そういうやり方を、半分は楽しいと思いつつ、半分は男性研究者の間で、へんな言い方ですけどなめられないように自分が必要であると思う以上にそういうことをやっているかなと思う。(略) 男性はそれなりに野心も持ち最初から博士課程を目指す。女性のほうがそういう意味では堅実で現実的かもしれない。(B 修士・20 代)

< 深刻なケース >

去年まで女性は自分だけだった。入学するときに先生に雰囲気合わないかもしれないよといわれたが、入って仲良くすればどうにでもなると思っていた。けど実際に合わなかったようだ。元々他大から来たので他の専攻の人にもよく知らないし、所属研究室以外に交流もないので、一人ぼっちみたいな感じ。[テーブを止めた後で] 男の世界という中に自分ひとりでいることがいづらく疎外感を味わい、そのこともこれ

から先研究職を選択しないという理由のひとつになっている。[さらに話を聞くと]のけ者にしたりことさらに失敗をあげつらうなどいじめに近い関係が続いている。自分の狭い研究領域ではこの先必ず関係はついて回るので、それを考えると専門の研究から離れたところで生きていきたいと思う。博士の学位をとり助手職にも就いたが、関係のない一般企業への就職を考えている。定期的な研究会は修士のときは積極的に参加していたが、このごろは気持ちが疲れてしまってなるべく行かなくてすむものは行かないようにしている。(博士課程)

(4) 研究にかかる費用について

院生にとって主として必要な研究費は、本代や学会の会費や旅費、調査費用である。理系では教員が書籍や学会参加にかかる費用を研究費で出してくれる例もあったが、概ね節約して高額な文献を買い控えたり、遠方での学会への出席を控えたりしていた。またフィールド調査では多額の研究費が必要になるため、貯金を切り崩したり、蕎麦屋のウェイトレスやドラッグストアのサンプル配りをして費用を捻出している例もあった。

書籍などは先生が買ってくださいるので書籍購入費はかからなかった。自分で負担するのは学会費くらい。(P博士 1-3年・20代)

研究費は十分とは言いがたく、研究者としてこれでいいのかと悩みつつも高額な文献購入などは見送ることもある。(G博士 1-3年・20代・男)

学会費や旅費がばかにならない。今は非常勤での収入や奨学金をもらっていた頃に貯めたお金を切り崩してやりくりしている。(W博士 4-6年・30代)

(5) 学会活動や学外のネットワークについて

修士課程では学会への参加や学外のネットワークについてはあまり語られず、所属する研究科、とくにゼミ内での人間関係が中心のようである。博士課程では、知人を通じて他大学での読書会や研究会に参加したり、それぞれの研究領域に関連する学会に所属し、学会報告や学会誌への投稿を行っていた。

現在は5、6つの学会に所属。学会は人とつながるというより、入会するかしないかで報告や投稿ができるから入っている。(Q博士 4-6年・20代)

大事なのは先輩、後輩や“陰の指導教授”。優秀な後輩からは刺激を受ける。研究仲間も研究環境。細分化してこもりがちになるが、他のゼミや研究科の方と話す機会

があると、（気持ちも）すっきりするし、（研究）計画がたてやすくなる。先生と一対一だとあわないとき逃げ場がないが、学生同士の交流は見識が広がるし、研究の助けになる。特に調査をやるとなると、一院生では無理がある。そういう意味でも、先生には、学校の外にも広いネットワークを持っていて、院生にその橋渡しをしてほしい。なかには自分以外の先生に指導を受けるのを嫌がる先生もいる。露骨に怒る人も。どの先生についていけばよいのか・・・いつの間にかその先生の派閥に入れられても困ることも・・・そのへんのパワーバランスを見極める力も院生には求められますよね。（W 博士 4-6 年・30 代）

2-3. 進路・ライフプランについて

(1) 進学理由について

学部生あるいはそれ以前から研究者になりたいという希望を抱いて大学院に進学するケースもあったが、多くは博士課程進学時には研究職を念頭においていたと語られた。「研究者になるつもりで進学したが、研究者にこだわっているわけではない。研究者に限らず、就職できればいい」（N 博士課程 1-3 年・20 代・男性）という意見のように、研究者になる「意志」や「覚悟」は進学当初から明確に意識されているものというよりは、博士課程で将来を見据えるうちに育まれるものである。研究者になるかどうか、なれるかどうかは次の例にみるように、博士課程の大学院生の最も根源的な不安定要素の一つなのである。

博士課程に進学したときは研究職を目指そうという意識もあった。（略）また、研究をして論文を書くことも身についていたので、博士課程に進学したが、その時点ではまだ研究者になるという覚悟は身についていなかった。（略）[博士課程の]1 年 2 年とかだと、そういう腹積もりをするにはあまりにも不安定なんですよ。腹積もりしたからってなれるもんじゃないんで、腹積もりもできない。（T 博士 4-6 年・30 代・助手）

(2) 将来の進路について

将来の進路については学年や助手職に就いているかどうかなどでかなり見通しが異なってくるが、特に博士課程高学年層の回答者に通底していたのは、将来の保障のないことに対する不安であった。自分の属する研究室に博士課程終了後もなかなか就職が決まっていけない優秀な先輩を身近に見て、自信を失ってしまうと語られた例も複数あった。そしてその不安は自分ひとりで抱え込まれており、解決のための窓口を探しあぐねている状況が明らかになってきた。

結婚したいと最近すごく思う。（略）結婚しても研究を続けるかはわからない。今

年 3 月に籍が切れるということで、途方にくれているところです。数年非常勤をやって就職するとしても、その数年がもう精神的にもつか自信がない。本当にずっと非常勤の人もいるし。仕事を探しにキャリアセンターにも行って見たが、学部や修士卒ぐらいが対象で、探し方もよくわからなかった。(W 博士課程 4-6 年・30 代)

諸先輩たちの就職状況はとてみたいへんだ。結婚して奥さんの扶養に入ったなどという話も聞くし、そういうのを見ていると余計に不安になる。バランス感覚を持った優秀な学生は企業に就職する。(K 修士・20 代)

博士課程に入る時は、何十年も非常勤やってでも、石にかじりついてでも研究者になる覚悟が求められる。この道を選んだ以上、まっとうな幸せはあきらめるべきなのか。(W 博士課程 4-6 年・30 代)

将来、助手になるか(現在続けている正規雇用の)仕事を続けるか。助手になった後に収入の保障がないので研究一本に絞って仕事を辞める踏ん切りがつかない。助手の後ですぐに専任講師になる人はすごく恵まれた人だと思う。助手になることも考えるが、35 歳が応募締め切りなのでぎりぎり、それも不安。(L 博士 1-3 年・30 代)

中には次の例のように、自分の研究を生かした職につけない場合を考えてもう一つの道を確認しようという場合もある。

プロの 学者でやっていくのが第一志望。大学での研究職、博物館の学芸員ということのを第一志望で考えてはいるが、それだけでは怖いので、自分の専門地域を生かして 2 年間の留学中に語学をものにして帰ってきて、いざとなれば中国語の先生でも、でなかったら、わりと中国は外国人教師の需要がある。パーマネントの仕事ではないが、その場しのぎだけど、それで生計を立てていけるようにもしていかなければならないって言うのがある。今は何も持っていないが、両方を目指していくというのが、20 代後半の課題だ。(K 修士・20 代)

(3) 進路決定にあたり重視すること

自分の専門を活かせる研究職に就きたいが、ポストが少ないために実現可能性が小さい不安がある。

自分の分野では実地社会での研究ができないので、基本的には大学の研究者(教員)として就職したい。わかっていたことではあるが自分の専門領域での就職は難しい。自分と同じくらいの業績の人でも就職できる人とできない人が出てくるので、周囲と

比べて不安に思う。(G 博士 1-3 年・20 代・男)

(重視することは)待遇を重視する。安定が保障された仕事。これまで NPO の不安定なところで仕事をしてきたので、不安定な働き方がどういうものかわかっている。同時に、助手になり、正規雇用で働く安定、その中で出産を経て、どれだけ生活が安定できるのか、精神的にも安定できるのかとその違いをよくよく思い知った。私は残念ながら正規の職はあと 1 年で失うが、これからは、今までみたいな志とかやりたいことではなく、安定した部分、保障されたものを求めています。将来は専任で安定した職に就きたいと思っているので、大学か研究所かはわからないが、そこに就職して仕事を続けていきたいと思っている。今年 1 年はそのための準備期間と位置づけている。(T 博士 4-6 年・30 代・助手)

これらの意見の背景にあるのは男女を問わず、博士課程終了後に安定した職に就く保証がないことに対する不安である。博士課程後半の出口が近づいてきた層では、助手という期限付きの「安定した生活」の経験を積んだ結果、重視することは安定した生活の保障であると断言した例もあった。

(4) 研究と結婚・出産/育児について

女性の場合、出産と研究の選択、とりわけ学位取得や就職と出産の優先順位の決定を迫られていると感じているケースが複数あった。いずれもまだ現実問題ではないこともあり、誰かに相談するという事もなく漠然とした思いではあるが、研究を優先させたい、だが可能なのか、という不安が言外に語られた。

出産ということになると、先生のほうからもやはり 6 年の間に学位論文を書いてドクターの学位をとるのが望ましいということを言われていますので、結婚はするんですけど、出産ということになりますと、数年、あるいはもうちょっと、研究のほうを優先させて、ドクターの論文のめどがつくか、あるいは学位を取得したあたりでまあそのあたりのことは考えようかなと思っています。(B 修士・20 代、K 修士・20 代)

自分が研究を継続する場合、家族は諦めなければならない、そうは思いたくないのだけど、切磋琢磨していくと決めたら結婚や出産はどうか、とってしまう。(P 博士課程 1-3 年・20 代)

タイミングが合えば結婚し、出産したい。研究のためにあきらめるということは避けたい。また、仕事か研究か家庭か研究かということも出てくるかもしれないが、仕

事が研究を選択するのであれば相手の経済力にもよるが、研究を選択するだろう。家庭が研究を選択しなければならないような人とは結婚しないだろう。(L 博士 1-3 年・30 代)

そのような迷いや不安の背景にあるのはロールモデルの不在、出産後の復帰の保証が明確でないことにもある。

産んだら辞めるっていうのはやりたくないが、でもやっぱり子供は産みたいです。結婚している先輩はいるが、子供を産んでという人はいない。安心して出産できる保障が欲しい。少なくともリタイアしなくても済む展望がほしい。まず、復帰できるというのがある。復帰したいときに「ブランクがあいたからもういらぬ」と言われるのが不安。間があいたからもう辞めなさいとは言われぬ状況が欲しい。(K 修士・20 代)

産休が取ればいいが、産休をとっても少しでもブランクがあつたりすると乗り遅れるという感じもあって、出産の機会は減ってくるのかなという感じはする。(S 科目等履修生・30 代)

年齢を考えると、結婚や出産はいつかしたいなあとすることは思っている。例えば、職についていれば、育児休暇とか制度的に保障されるものがあるが、今この身分だと、博論の提出の期間も延びないとすれば、制度としてはおかしい。女性が出産するのは社会的にもよくあることだから、ふつうに働いている女性がしているように休暇を取らせてくれてもいいんじゃないかと頭では思う。(Q 博士課程 4-6 年・20 代・助手)

ロールモデルに恵まれていると語られた例では、もっと女性教員を増やす必要があると提案された。

元々女性教員の数が少ないので、ロールモデルになるケースが少ない。自分が 30 歳 40 歳になったときのロールモデルがない。いても極端な人で。それこそ研究のために全部なくしましたとか、家庭を重視するために研究は断念して英語の講師になりました、みたいな例。ロールモデルがないというのはよく聞く話だ。自分の場合は恵まれていて何人もいる(30 代、40 代、50 代の女性の先生がいて、ファッションの話もできれば真面目な学問お話もでき、女性として研究職でやっていくときに何が大変で何がよかったかというような話をしてもらえる。そのようなモデルが目の前にいるのはとても心強い)。が、絶対的な数が少ないのは問題だと思う。(自分のように)目

標にする人がいっぱいいるというのは恵まれていますね。(R 修士・20代)

実際に在学中に出産したケースでは、大学院生という身分で研究を継続することと出産・育児とのジレンマ、世間的に承認されていない大学院生の出産へのプレッシャーを一人で受け止めていく精神的な苦悩が語られた。

自分が修士のときに出産したときには自分の中でも葛藤が大きかった。保育園で「大学に行っている」と言えなかったこと、子どもが小さいときに自分が勉強しているのかという葛藤。そういうときに勉強がはかどらないと鬱々としていた。そこに経済的負担や不安定さも大きいのしかかり、学生を続けられたのは奇跡的だと思う。(T 博士 4-6年・30代・助手)

育児支援と比較すると手薄な介護支援も必要であろう。

親世代は実の親も配偶者の親も、今は元気なのでまだ大丈夫だと思う。保育面の支援は保育所など、充実してきているが、万一親世代が倒れたことを考えてみると、今後、すでに研究者となって活躍されている先生方も男女を問わず、家族の介護が必要となるケースが出てくると思うので、緊急の入所施設などがあると助かると思う。保育と同じように大学の支援があると助かると思う。(O 修士・40代)

2-4. 支援について

(1) 相談窓口の体制・組織・スタッフ構成・相談内容についての要望

先に「第2節(2) 研究指導について」で紹介したように、実際に問題を抱え込んでいような場合、ためらい、恐れや寄る辺なさなどの感情からできるだけ穏便に解決を図りたいと望んだり、大学の機関に相談することを先延ばしにする傾向がある。例えば次のケースでは研究室内部で発生したつきまとい行為に対して、周囲の進めにもかかわらず自分で解決したという。

つきまといをされた友人に対して、本人が他大出身ということもあって、ことを大きくしたくないという遠慮があってどこにも相談をしなかった(B 修士・20代)

このように、専門相談機関の「敷居の高さ」の前でためらっている人々に対する「場」を求める意見があった。

常駐でなくても困ったときに相談して、どこへ連絡したらよいかを教えてくれるような場所があるといい。できれば 24 時間で誰かいると理想的。困ったときに、早稲田大学が責任をもって紹介するなり、どこへ連絡すればよいかに関する情報をストックして提供すること。論文や研究の指導は教員がやるとしても、勉強以外のフォローは教員以外でもできる。とにかく話せる場、相談できる場所が必要。(M 修士・40 代)

(2) 育児・介護補助費用について

育児・介護への費用支援はまだ経験していない層からも期待が寄せられている。

育児介護支援も歓迎。ぜひ利用したい。介護なども今後、当然ニーズがでてくる。親の具合が悪い人もけっこういる。それで進路かえて就職した人もいる。自分も考えたことがある。(N 博士 1-3 年・20 代・男性)

実際に保育所利用を経験したケースでは、若い夫婦の少ない収入に保育料の負担がかなり大きいことが語られている。夫婦の一人が大学院生である場合、自分の学費や研究費の出費もあり、精神的な負担も計り知れないものがある。

若くして出産する場合、経済的なゆとりが全くない。保育所の施設も学生枠を作って別の料金体系で利用できればいい。学生ということで公立・私立の保育所を利用できないことも多い。

公立は前年度の所得税によって保育料が決定されます。上の子のときは 0~2 歳児までが月額 25,000 円。2 歳のときは夫の異動で残業がつかなくなったため、特例措置によって二段階下の 21,000 円にしてもらいました。当時月給は家賃を差し引いた手取りで 11 万円です。うち夫に 3 万円を渡し、食費含んだ生活費が 6 万円くらい。冠婚葬祭や家具や洋服、子どものものを買ったらもうゼロ円ですよ。夫は当時 28 歳です。3・4・5 歳は 18,000 円です。保育料は学生支援機構の利子付き奨学金月 8 万の中から出していました。下の子は今年の 2 月から保育園に入りましたが、無認可なので保育料は 44000 円です。4 月より新宿区だけに導入された特別補助によって、33000 円になりました。

学生への保育料補助は、絶対的にあってしかるべきだと思います。大学院に通って、月額 4 万払えるのは、本当に高所得層だと思います。公立の保育園は、「学生」の(入園優先基準の)得点は低いいため入所はなかなか大変だと思います。(T 博士 4-6 年・30 代・助手)

大学院生という立場で出産育児をするということは、子どもの父親もまだ若く収入もそ

れほど多くないだけでなく母親自身が就業していないという条件も重なり、経済的にたいへんな困難を強いられているのである。また、自治体によっては公立の保育所の選考基準で「就学」の順位が低い場合もあり³、比較的保育料が安い公立保育所に入所が難しいことも考慮しておかなければならない。

(3) 育児介護休暇（休学）復帰後の支援への要望

育児介護休暇復帰については、指導教員の理解と本人の意思尊重が重要だという意見が複数あった。本人の決定以前に教員側のひょっとしたら善意かもしれない親切が、女子学生を研究の場から遠ざけてしまうこともありうる。教員が受けるべきプログラム、またはチェックシートのようなものがあると未然に防ぐことができるのではないかという提案もあった。

子どもを預ける場所とお金のことがクリアで切れれば戻れると思う。もう一つは指導教員の理解が必要。妊娠したら「あの人は大変だろうから研究会などに呼ぶのはやめよう」と、本人の決定以前にはずされてしまうので産めないということも多々あると聞く。（T 博士 4-6 年・30 代・助手）

産休や育児休暇の後で復帰した際に不利が無いようにしていかなければならない。女の人で小さい子供がいるからということで、もしかしたら休むのではないかということではじかれないようにしなければならない。制度ができて心壁が残るだろう。「子供がいるから休まれると嫌だから採るのはよそう」という本音が回避できるようなチェックリストというものが作れないだろうか。「子供がいるからというので採用を手控えていないか」とか、「いいテーマを性別によって男性に有利に割り当てていないか」などのシートがあってもいいのかな。制度はあっても心壁は残るし、それを取り除くのは嫌な言い方だけど、教育だと思う。それが一番大切で一番大変だろう。（O 修士・40 代）

実際に出産したケースでは、出産し育児をしながら研究を続けていく上での不安を、指導教員の「いいじゃない」という一言、「堂々と産休とればいい」という後押しがあったので安心できたということが語られる。

³ 例えば杉並区の場合は「居宅外就労（外勤）月 20 日以上・8 時間以上の就労常態」が 20 点で最高だが、「就学（大学・大学院）」は 12 点で、「就労を目的とした専門学校就学」（15 点）より低く、「居宅外就労（外勤）月 16～20 日・4～6 時間の就労常態」と同レベルである。新宿区は常勤 20 点に対して「就学」は一律 12 点である。このように「就学」枠を設けている自治体と、江戸川区や足立区のように「就学」枠に「居宅外就労（外勤）」を準用する自治体がある。

子どもを預けることができること、経済的に安定していること。それに加えて指導教授の支援が大切。一般社会では子どもを持って自分も勉強を続けることへの風当たりというのがある。それは他人に言われるだけではなく、自分のなかでも葛藤としてある。たださえマイナスに働く、そこをプラスとは言わないまでもせめてニュートラルにしてもらえる、「いいじゃない」って言ってもらえる環境っていうのは必要だと思う。親、配偶者、指導教授、誰がいるかもしれないが、もし誰からもそういうことを言ってもらえなかったとしたら、みなくじけて辞めていくと思う。これからは私のことじゃなくて子どものことを考えようというようになっていくと思う。いろんな選択を自分だけではできないときもちょっと背中をぼんと押してくれるような人がいるだけで強いと思う。指導している院生が出産することになった教員が必ず受けるべきプログラムみたいなものが整備されるといいかもしれない。(T 博士 4-6 年・30 代・助手)

背中を押すという役割では、指導教授の影響がすごく大きくて、助手になることが決まったときに妊娠がわかったが、指導教授は「それでも堂々と産休をとればよい」と言ってくれた。それで結構安心した。「そうだよね、それで子どもがいたって助手やってもいいんだなって思った」誰かがそういつてくれないとびびっちゃうところがある。(E 博士 4-6 年・30 代・助手)

(4) 研究継続に必要なこと

出産・育児に関しては、出産後も安心して研究に取り組める環境整備を望む意見が多かった。また、就業しているものには出産休業や育児休業が認められているが、それと同じように大学院生にも出産育児のための休学制度が整備されていると研究の継続につながるという意見も複数みられた。

産んでも産まなくても仕事がないのは事実ですから、ただ、産むと決定打になっちゃうというのだけは避けたい。出産してもブランクに関わらず現場復帰ができるという保障が欲しい。(K 修士・20 代)

イギリスに留学していたが、妊娠がわかり帰国して出産した。体調にも変化。妊娠中は勉強できなかった。イギリスでは女性研究者が圧倒的に日本より多いし、しかも権力のある女性研究者も多くて、出産やライフサイクルに寛容。それじゃ研究が少し遅れても仕方ないね、みたいな寛容な態度で接してくれる。安心できる。出産、妊娠というのは女性の研究者として当然通る道だし、先生たちもなれている。向こうで妊

娠がわかったときも、それは当然のことだからサポートも当然だという態度で接してくれた。サポート体制もしっかりあって、学費免除の休学制度、1年単位で論文提出を先延ばしできる制度もある。自分も提出を先延ばしたままで帰国。いつか提出したいが、今は日本で博士号を取るほうを優先している。(E博士4-6年・30代・助手)

(出産・育児等で)休学・退学したりしたブランクのある研究者の受け皿をつくってほしい。(H博士1-3年・30代・助手)

学費免除の休学制度があるといい。(H博士1-3年・30代・助手、他)

他方で、具体的な支援策が不明だという意見もあった。

産休明けの復帰で生じる困難として、どのようなことが想定されているのだろうか。もしわからないことがあってもゼミの仲間には聞けるし、休んでいる間もゼミのMLで情報は得られると思う。大学との関係が全く途切れるわけではないので、インターネット等がなかった時代に比べれば不安は少ないのではないか。(C博士1-3年・50代)

(5) 女性研究者支援について有効だと思われること

概ね二つの意見に集約できる。1つはライフプランを選択するときにロールモデルがほしいという意見。人生の大事なことを自分ひとりで決めなければならないときに、そういう経験乗り越えて研究キャリアを積んでいる先輩の研究者たちの具体的なメッセージやアドバイスがほしいということである。

自分ひとりで決めなければならないというときに相談に乗ってくれる窓口が欲しい。例えば、自分のキャリアのために子ども一人置いてアメリカに行かねばならないということとか、遠方の大学でポストがあいた、チャンス、というときにどうするか、そういうときに、どうするって聞かれても、いや、わからないですねえ、どうしようもない、どうすればいいのかわからないっていうのが正直なところなんで。それは自分の親に聞いてもお前の心一つっていわれるのは目に見えているので、それは具体的にそういう経験をなさってそれを乗り越えてきた先輩方の、具体的なメッセージであるとかアドバイスがどうしても欲しいなっていうのがあります。絶対そうなったときに、今の状況だとそこ遠いからいいです(注:遠くて赴任できないから断る)とか言い兼ねないから。モデルがないから。こうすれば両立できるよとか、こうすれば乗り越えていけるよ、頑張れるよとか誰も言ってくれない中でって言うのが尻込みしちゃうなって、みすみす見逃すだろうなって言うのが目に見えているので、悔いは残したくない

いので。やりたくてやってきたことなのでそういうときにアドバイスがいただけたらなあって思います。(B 修士・20代)

2 つ目は、女性研究者同士の交流の場、情報交換の場、ネットワーク、専門を越えて、気軽に参加できる女性研究者サークルのような交流の機会がほしいということである。研究室で女性が一人しかいないような場合、ちょっとした話をするだけでもかなりのストレスの解消にもなる、「相談」というにはちょっと敷居が高いような話を聞いてもらうだけの場がほしい、子育てに関する情報や研究と育児を両立する仲間の声を聞きたいといった意見がだされた。

保育園のこととか、必要なときに、必要な情報を入手できる機会、こうして話せる機会があるといい。出産・育児の経験者や育児と研究を両立している人の話が聞きたい。特に研究者という属性の人の集まりがいい。一般の働くママとはライフスタイルも違うし。雑誌なんか見ている生活タイプがぜんぜん違うから参考にならない。研究者という属性の人、立場の人と話しをする機会がほしい。これから漠然と産もうと思っている人も参考になる。なんとかなる、とわかるということも大事。個人のネットワークじゃ限界もあるし。(E 博士 4-6 年・30代・助手)

子どもを生んだのも自分の選択だし、(子どものいない)友人にも相談しづらい。誰に相談していいかわからない。保育園入園の情報も必要だし。(入所基準についても)院生も職業訓練扱いにしてほしい。まだ産んでない人も、産んだ人の話を聞いてみたい。ロールモデルがないから、周りに相談する女性がない。女性教員は少ない。友達でも出産して人がいないので、友達にも相談できない。子どものいない人に子どもを含めた生活の相談はできない。子どもが欲しくてもできなかったという人もいるので、難しい。浮かれて子どもの相談を誰それに相談していくわけにもいかない。(E 博士 4-6 年・30代・助手)

その一方で院生がネットワークからもれてしまう存在であること、ネットワークを立ち上げてそこにうまくアクセスすべき方法が課題だということも指摘された。

[例えばネットワークのようなこと?]そうですねえ、でも、院生ってそういうネットワークから埋もれた存在と思うんですよね。だからどこでそういう情報を得るか、事務所の手続きをするところかな。探せばいるし、私みたいな人も探せばいる、でも探さないとわからないっていう、でもそこで探そうとするかっていうところでの躓きが大きいと思うので。[探す前にそういう 이슈があるということに気づくかどうか]

かということも含めてね。]そうですね。(T 博士 4-6 年・助手・30 代)

(6) 女性教員の積極採用について

教育的な観点から女性教員が必要である、女子学生の割合に相応する女性教員は必要だ、これまで一般的に男性が優遇されてきていることを考えると、その不公平を是正する必要もあるとの理由から、女性教員の積極採用を肯定する人が多かった。さらに目標値の根拠を明示して説得力を持たせる必要があるという意見や、男女共同参画といいながらも目標値が半々でないのかといった意見もあった。

積極的に採用すべき。自分は、ジェンダーやセクシュアリティといったものをさしおいて人間として研究することは不可能だから、〔女性の〕教員数が少ないのであれば、研究の質、教育の質にバランスを持たせるためにも必要。学生にとっても女性教員が少なすぎる。目標値については、根拠を出してほしかった。なぜ半々じゃないのか？時間がかかると思う。育てる人が男性だから。(Q 博士 4-6 年・20 代・助手)

アファーマティブアクションは必要。それに反対する人のフラッシュバック[バックラッシュ]がくるが、ある種の「えこひいき」は必要。それによって変わるメリットのほうが大きい。優秀な人が職につくべき。同じくらいのレベルなら女性を採用するというレベルで。(N 博士 1-3 年・20 代・男性)

アファーマティブアクションに賛同するが、最初に人数ありきで質的な基準が不透明になることは避けたほうが良いと思う。最初に人数ありきではなく、基準を明らかにしたほうが良いと思う。男女の利害が対立するとは思わない。しかし明らかに業績の差があるのに業績の低い女性を優先すべきではなく、同じくらいの業績の場合に女性を優先することが望ましい。透明性の確保が必要だろう。逆差別といわれることもあるが、一般的にこれまで業績の高い女性よりも業績の低い男性を採ってきた経緯があると考えるので(「うちの大学は女性は採用しません」等)、その点を考えるとこれまでの不公平を是正するということなので公正なことだと思う。(G 博士 1-3 年・20 代・男)

2-5. 男女共同参画に向けての意見・要望

(1) 男女共同参画へ向けて必要なこと

時間への配慮

家事・育児と研究を両立するためには、家事・育児にかかる時間への配慮も必要となるだろう。

もし子どもが生まれたりしたらと思うと、先生から振られる仕事が多かったり、突然だったりする。突然対応するのは難しい。家庭や子どもがいたら大変。仕事を頼もうとするときは、年間の予定をあらかじめ提示してほしい。わかっているなら、こちらからもフォローできる。男は女がフォローするから大丈夫なんだろうけど。私たちはごはんもつくって洗濯もして掃除もしてるんだよー。女の先生はちゃんと前もって仕事をふってくれる。あと2ヵ月後にあなたにこういうことを頼むからね、といわれる。すごくいい(先生)。その先生はお母様の介護をしながら研究をされた方で、すごくわかってくれる。男の研究者とぜんぜん違う。(J科目履修生・30代)

家庭によってそれぞれだと思うけど、ゼミによってはただらだら、時間が決まっていない。夜9時や10時まで遅くなることもある。社会人の方で家に帰ると12時で、もうその日は家のことをやらないという人もいた。私のゼミは時間をまもってやるが、それは珍しい。家庭をもつ人にとっては家のこともあり、時間が気になる。早く帰るのも気がひける。修士論文を書いている人はそれでも見てもらいたいし。面白い議論が始まるなかで帰るのもいやだし。もう少しそのへんに配慮してもらえると助かる。(A修士・40代)

教員の意識改革を望む声も聞かれた。

男性は当事者意識に欠けるので、ただ事実を伝えるだけじゃ通じない。ある役柄を割り当てて実際にやってもらうなど、事実を実感させるような教育が必要。(J科目履修生・30代)

(2) 女性研究者支援プロジェクトへの期待

本研究所の広報の必要性は多くのインフォーマントが指摘した。また、プロジェクトへの期待も語られた。とりわけ、ここでの聞き取り調査で自分のことが話せてとてもよかった、という声もあり、このように話ができる場所の必要性も寄せられた。

まだまだぜんぜん(男女共同参画は)進んでいない。だから大学でそういう動きがあることや、意識を高めるような研究所があることは重要。(修士・40代)

女性研究者支援という、この動き出しているプロジェクトがあるという事を知らないと思う。せっかく設置したので広報活動が必要だと思う。(修士・20代)

頑張ってくださいというか、ほんとうによろしくお願いします！(修士・20代)

相談窓口は行かなきゃと思っていくようだと行きにくいので、なるべく敷居を低くして気軽に行けるところが望ましい。こういう研究所があると知って驚き半分、心強いと思った。頑張ってください。(博士1-3年・30代)

制度は変えていっていただきたいと思う。ただ、教授と学生という力関係はあるので、その隙間にすうっと入っていくように活躍していただけたらなあと思う。今回の聞き取り調査などにしても、大々的にポスターなど貼ってあると、もしかしたら、「君、なんでそんなところに行くの」ということになりかねないかもしれない。そうなると身動きが取れなくなる学生もいるのではないか。(修士・40代)

もはや「女性支援を！」という時代でもない。ちゃんと中身を吟味すべき。(博士4-6年・20代)

今回の広報の仕方は、もっとシステムの、皆さんがもっと取り組みやすいような出し方をなさるといいと思う。私の周りにもここに来て話をするといいい話を聞けるとか、逆に本人にも話をするのでいいという方がいらっしゃるけど、時間を作っていくまで、ちょっとそのステップが楽になるような広報があるといいなあと思います。(博士4-6年・30代)

(3) 異なる研究科に所属するインフォーマントが同席した面接調査の感想

調査でグループインタビューに参加したケースでは、異なる研究スタイルや研究環境の情報を得ることができたという意見があった。

今日は出産・育児をしている人の話がきけてよかった。これから結婚や出産する人も、育児と研究を両立している人の話が聞きたい。・・・最初アンケートに答えたときは、「私は女としてあんまり困っていないんだな」と思ったけど、今ここで話を聞いて、自分が子どもを産んだら大変だなということがわかった。(D博士課程1-3年・20代)

また、「政治学や社会学は個人で研究できるが、心理学は集団で研究することが多

い。そういう研究方法の違いもある」(D 博士課程 1-3 年・20 代・E 博士課程 4-6 年・30 代・助手) というように、互いの研究環境の違いや、研究方法の違いに気づくことができたという感想も聞かれた。

このような感想から、研究分野を越えた出会いの場やネットワークの有用性が示唆されているといえる。

(4) 女性研究者自身のエンパワーメント

F さん(博士 1-3 年・30 代)からは男女を問わずジェンダー意識の改革が必要だという、以下のようなメッセージも寄せられた。

このアンケートのメールを見たとき、子育て経験者としてはこたえなければと思った。大学全体でこういう意識をもっていたことがうれしかった。自分の代で完成しなくても、次の人たちが自分と同じ躰きの思いをしないのですむかと思うと、それだけでもよかった。研究能力の高い女性が研究をあきらめないですむ。周りにこの人きつと優秀な研究者になれるのに、出産で(研究から)身を引く女性がいた。もったいない。そういうケースは少なくない。そういう人がでないようにしないと。1人の女性のためでもあるし、そういう人が取りこぼされるのは、学术界全体の損失になる。

もっと女性研究者自身もわりと自分をこうだからだめ、子どもがいるから無理という発想に至らないようにしてほしい。もっと前の段階でそうじゃないのよ、可能性はいくらでももって広げることも保持しておくこともできるので、本当に意識をどうもっていくのか、どういう形でやっていくのか、家庭を顧みない馬車馬のような努力の仕方は難しいかもしれないが、そうじゃない質の違う努力の仕方もある。そういう意味では女性自身の意識改革をもったら女性研究者自身の可能性も広がる。

(小村由香・笹野悦子)

第3章 課題の考察 大学院生の研究者像の形成と不安

本章では第2章で項目ごとに取りまとめた語りから見出されたいくつかの課題を考察する。第1に大学院生が考えている「研究のやりがい」や「研究者アイデンティティがどのように確立していくか」について考察する。第2に、大学院生が「研究者」をどのようにとらえているかについて考察する。第3に理科系（実験系）の研究のあり方を検討する。そして最後に院生が研究生活を通じて抱えている不安と生活の保障という考え方、また、関連する課題として結婚・育児と男女に関する意識についても考察していく。前章では本調査の課題に沿って問題点を抽出したが、本章では、女性研究者支援モデル育成事業「研究者養成のための男女平等プラン」が支援対象とする若手研究者の研究者像とジェンダー意識が、大学院という一定の期間においていかに形成されているかを記述することを目的とする。このことは翻って、本事業の支援事業の理念形成に貢献するであろう。

3-1. 研究のやりがい・研究者アイデンティティの形成

調査におけるインフォーマントの語り、特に進路に関する語りにはしばしば「研究者」ないし「研究職」という表現が出てくる。本節ではインフォーマントが「研究者」という表現にどのような意味を与えているのかを考察していく。

初めに指摘しておかなければならないのは、今回の聞き取り調査で語られた「研究者」ないし「研究」という用語から自分が目下エネルギーを注ぎこんでいる研究が生き生きと伝わってくるケースが少数であったことである。「研究者になりたい」という言葉は何度も聞くことができたが、それが自分の研究と関連付けて語られた例は少なかった⁴。

(1) 研究のやりがい

はじめに述べたように、本調査では研究そのものに言及した例は多くなかった。その中で研究のやりがいを語った例を検討し、三つのタイプを抽出することができた。一つは研究を進めていく上で研究そのものの楽しさを語った例。もう一つは尊敬する先生の薫陶を受ける喜びを語った例。最後は子どもができて勉強ができるありがたさがわかったと語った例である。

研究そのものの楽しさ

Kさん（修士・20代）は学部3年のときに、学部生だったが意欲を買ってもらったが偶然だったかわからないが、外国での調査に参加させてもらって楽しかったのがきっかけで

⁴ これは研究そのものについて語ってもらう項目を準備しなかった聞き取りの課題設定にも一因がある。

研究者を目指すようになった。「自分が恵まれていたと思うのは、一流の先生や先輩方に恵まれていたこと。この学問分野ではみんな自分のフィールドっていうのがあって、私の場合、研究の中心は 大学なので、そこの先生や学生さん、他の大学の先生方を中心とした研究会に参加してるといふふうで、指導教官の了承を得た上で行ってきている。調査に参加していく上で知り合いの先生方も増えていった。研究が楽しいといえる環境。いろんな大学から集まってきてるんですけど、そこに参加させてもらって研究会活動を優先させてもらっている。居場所として研究室がちゃんとしていて、論文を書くときにはちゃんと指導をうけることができる。ほんとに恵まれていると思います」と話した。

詳細な記述は割愛するが研究そのものの楽しさを生き生きと語った例はこの一例だけであった。大学を越えて組織された調査団に研究費を工面して参加し、そこで一定期間調査をする、帰ってきてから分析をして指導教員の指導を受けて成果を論文に取りまとめるといった流れが研究生活のパターンとして確立されつつある様子が語られた。大学外の調査団への参加が彼女の研究では大きな位置を占めているが、国内の一流の研究者とともに調査に参加することが、さらに自分の研究の面白さに目覚めていくという機会になっている。

尊敬する先生の薫陶を受ける喜び

Lさん(博士課程1-3年・30代)は「この指導教授のもとで指導を受けるために進学した。修士の時代からよく指導してもらっていて、ついでにこうと決心した。指導教員との出会いが決定的であり、その教授との出会いがなかったらたぶんこのように研究を再開し研究者を目指すということもなかっただろう。先生の弟子になろうと思った」と話している。実際の研究は自分が現在就いている職業経験が生かせるような領域なので仕事と両立して研究を続けていきたいと考えている。「研究は楽しいが時間が足りない」という語りはあったが、実際にどのように研究に取り組んでいるかについては触れられなかった。Qさん(博士課程4-6年・20代・助手)は指導教員に恩返しをすることが自分の研究の原動力になっていると話す。「本当に率直に言えば、指導教員と離れることが想像できなかった。先生に何かしなくちゃ。恩返しをしたい。ちゃんとして吸収して指導受けて去っていくというのではなくて、いろいろなものを吸収してしまったので、何かしなくちゃ、恩返ししなくちゃいけない。やっぱり恩返しを考えると研究職。それ以外の点では、研究職につかねばとか、こだわっているわけでもない」という。

子どもができて勉強ができるありがたさがわかった

Eさん(博士課程4-6年・30代・助手)は、「子どもを産むことで勉強することの楽しさや喜びや幸せな気分が高まったりすることはないですか。こんなに勉強できることが有難いというか幸せなのか、改めてわかった」という。それまで自由に時間を使い研究をしていたEさんは、出産を機に、時間的な制約があるなかで研究をしなければならなくなった。

しかしそのことで逆に自分の研究時間への集中度が増し、研究に専念できる時間の貴重さと研究できること自体への幸福感を得ることができたと語っていた。

(2) 院生としてのスタンス（研究者アイデンティティの確立）

次に研究者アイデンティティがどのように確立されるか、大学院生としてのスタンスについて検討する。研究者アイデンティティについて語った T さん（T 博士課程 4 - 6 年・30 代）の例をみてみたい。

T さんがそもそも大学院進学を意識したのは学部 3 年のゼミが始まってからだった。修士課程進学の際は研究者を目指してはならず、NPO 活動（職員）をしていたので、実践と同時並行的に生かしていく研究を目指していた。修士課程入学の頃は勉強よりも活動に還元できるような研究を目指していた。

博士課程に進学したのは、それまで自分の仕事としていた NPO では収入面で食べていけないというのがあり、また、研究面でも社会的認知が低いので、大学に軸足を置いておいたほうが自分のやりたいことにはプラスだと考えていたからだった。そのような NPO との関連だけでなく、修士課程では研究論文、研究者を育てようという意思の強い先生の指導を受け、研究室の院生も学会直前に集中的にお互いの論文の読み合わせをするなど、研究をして論文を書くことも身について研究をすること自体が面白くなっていたことも博士課程への進学を促した。NPO でも研究をしていたし、博士課程に進学したときは研究職を目指そうという意識もあったが、その時点ではまだ研究者になるという覚悟は身についていなかった。

T さん（博士課程 4 - 6 年・30 代）は博士課程に進学した時点で研究科を移籍した。そこでは十分な論文指導やゼミが機能していないと感じており、「学部の延長であれば許されても、お金と時間を割いてきている大学院生にそれはないんじゃないかな」という思いは今もあるという。そういうことを相談できる人はいない。同じ不満を持っている人に相談を受けるが、それを解決する糸口はないと思う。博士課程では、自分の研究もあまりうまく進まず、鬱々としていった。大人なんだし自分でやらなきゃと思っていたが、ほんとに孤独だったし、先生と 1 対 1 というのもしんどいものがあった。そういう環境から逃げる気持ちもあったかもしれないが、だんだん（NPO で）実践のほうに力を注ぐようになっていった。去年二人目を産んで弾みがついているが、それまでは毎日帰っては夫に愚痴を言っただけで、それは自分が不幸なのでどっかで転換しなければと思っていた。

だが、昨年助手に就任し、その頃第二子も出産したため、NPO は辞めた。今年は昨年やっていた非常勤講師も辞めて、自分の研究もこれまでのように場当たりのではなく、きちんと計画を立てて体制を立てたいと思っている。将来は専任で安定した職に就きたいと思っているので、大学か研究所かはわからないが、そこに就職して研究の仕事を続けたいと思っている。今年 1 年はそのための準備期間と位置づけている。今は助手職に就

いて、安定性を重視してこれからこれで食べていくんだという腹積もりができたという。博士課程の1年2年くらいだと、そういう腹積もりをするにはあまりにも不安定で、腹積もりしたからといってなれるものでもなく、腹積もりもできない。今はやっと腹積もりができてきたから、そのために頑張れるし、研究の進み方というのも経験的にわかったので、落ち着いて研究に取り組めると思うという。

Tさんの例では、4つの段階を経て研究者アイデンティティが確立されていく。第1段階は学部から修士課程にかけての時期で、大学院に進学して勉強した成果を社会活動に還元しようと考えていた。第2段階は修士論文を書く頃から博士課程に進学する時期で、ここで研究者という意識が芽生えてくる。重要な契機は論文を書くことが身について研究それ自体が面白くなってきたことである。博士課程に進学し、それまで社会活動においていた軸足を大学に移していった。だが、振り返ってみるとその頃は研究職に就くという腹積もりはまだできていなかった。博士課程の1・2年生は研究職に就く覚悟をするにはあまりにも不安定だというのである。第3段階は博士課程に進学して研究科を移籍した時期である。十分な指導体制が機能しておらず、研究に向かう気力そのものが希薄化していつてしまう。軸足をNPOから大学に移し変えていたにもかかわらず改めてNPOで研究と仕事に関わり始めてもいた。第4の段階は助手職に就いてからの時期である。正規雇用の職についてようやく将来研究者としてやっていく覚悟が固まっている。それと同時に助手の任期が切れるまでの1年間を、将来安定的な職について研究を進めていくための準備期間と位置づけて、自分の研究も体制を固めて計画的に進め始めている。

この例からは大学院生が研究者になっていく過程で指導教員が果たす役割の大きさを指摘することができる。Tさん(博士課程4-6年・30代)が研究者としてやっていこうと意識したのは自分の研究を論文という成果にまとめる過程で研究そのものの持つ面白さに気づいたからである。その過程で指導教員が果たした役割はたいへん大きいものがあつたと語られている。二つの研究指導と研究室のあり方を経験、比較して教員の指導が大学院生の力を引き出し研究者としてやっていく自覚を育てますれば、逆にやる気そのものをそいでしまうことがわかる。Tさんが「学部の延長であれば許されても、お金と時間を割いてきている大学院生にそれはないんじゃないか」といっているのは、学部と研究科での指導が別物として認識され、「勉強」が「研究」になっていくことに自覚的であることがうかがわれる。同じように教員の果たす役割の大きさは、先のKさんの例からも言える。彼女の場合は大学を越えた研究会での先生方との共同研究で研究の楽しさを知り、研究者を目指すようになったという。

ただし、聞き取り調査全体でこのように研究そのものの楽しさややりがい、自分がどのように研究者になっていくかを語った例はきわめて少数であった。上の2例は指導教員や研究室の仲間、学会の仲間を通じて研究をする楽しみを知り、そこに研究者としての喜びを見出したと語った貴重な例である。本項で問題にしなければならないのは、むしろこの

ような例が極めて少なかったことであろう。本調査では逆に指導が不十分であるという悩みが複数語られもした。指導が不十分であるために研究室の大学院生で自主ゼミを企画したがあまりよい成果を結ばなかったという例(Sさん)も報告されている。大学院生が教員の指導を強く求めていることがうかがわれる。指導教員だけではなくKさんの例のように学会や研究会活動を通じて研究に引き入れられ、研究のやりがいや楽しさを見出していくことが研究者として独り立ちしていく途上にある大学院生にとって有効な指導であると考えられる。大学院生は教員の指導や学会・研究会での研究活動への参加を通じて研究のやりがいや研究者としての自己アイデンティティを育てていくものであることが少数のケースからわかるが、それらの語りの少なさは、そのような教育機会を求める語られない声として受け止めなければならないだろう。

3-2. 「研究者」の意味するところ

(1) 「職」と「研究」

前節で大学院生の研究のやりがいや研究者アイデンティティの確立が十分に語られなかったことを述べ、その語りの少なさは、研究のやりがいに目覚め研究者の自覚を育ていく教育機会を院生が強く求めていることを意味するだろうと考察した。本節では、そうした大学院生にとって「研究者」とはどのように意味づけられているのかを検討していく。調査の語りのから「就職」を軸に三つの研究者像を抽出することができた。一つは「研究者になる」ことが目的化し「就職」という概念の中に位置づけられている研究者像である。二番目は研究それ自体に自己を体現する研究者像である。三番目は実践や実務を目的とした研究者像である。

「研究をする人」としての研究者

まず取り上げるのは、収入の手段はさておき、研究そのものを目的とした研究者像を語った例である。Kさん(修士・20代)は、将来の進路についてプロの 学者でやっていくことだと語った。「研究者」という用語こそ用いられなかったが大きな差異はないと思われる。進路決定にあたり重視することとしては、自分の専門では発掘したものを最重要視するので、遺物のあるところで研究するのが希望で、具体的には大学や博物館の学芸員だという。大学での研究職、博物館の学芸員ということを第一志望で考えてはいるが、それだけでは怖いので、自分の専門地域を生かしてこれから予定している2年間の留学中に語学をものにして帰ってきて、いざとなれば語学の先生か、そうでなかったら現地で外国人教師の職に就くことを考えている。「パーマネントの仕事ではないが、その場しのぎだけど、それで生計を立てていけるようにもしていかなければならないって言うのがある」という。ここには自分の研究と収入の手段は別物として区別する意識が読み取れる。研究環境において重視することについて、「まとまった休暇が取れること。夏に『表面調査』

に出かけたり実際の発掘調査を行うのもまとまった期間がないとできないので、休みが取れるところということですね。それを考えると大学が有利。現在、外国で発掘調査を行っているが、博物館の学芸員さんは取れて1週間というところ。それでも頑張って休みを取ってこられている状態。調査の最初から最後まで携わっているのはやっぱり大学の先生とか大学院生だ。だから、本当に研究環境として理想的なのは大学に残ることかもしれないんですけど、ちょっとその辺は難しいことなんです」と語っている。彼女が大学教員を目指すのは就職という目的のためではなく、研究を推進していくときの環境に恵まれているという条件のためであると点が特徴的である。

同様にTさん(博士課程4-6年・30代)も研究を続けていくために研究職としての就職を考えていると語っている。彼女は修士課程在学中は自分の研究を社会に還元することを第一に考えてNPOで活動を行っていた。だが、博士課程進学時には「研究職を目指そう」という意識に転じている。研究そのものの持つ面白さに気づいたことと、「大学に軸足を置いておいたほうが自分のやりたいことにはプラス」だと考えるようになってきたのだ。「将来は専任で安定した職に就きたいと思っているので、大学か研究所かはわからないが、そこに就職して研究の仕事を続けていきたい」と思っていると語っており、「研究者」という表現は使われていないが、Kさんの例と同じように自分の研究を続けていくために研究職に就くことを目指している。

Oさん(修士・40代)は約20年間企業で働き「人間の賞味期限が切れてきてもう一度勉強しなおしたい」と思い進学した。彼女はできたら研究職がいいなと思っているが、学問的な訓練は受けていないので、研究を続けて自分が使い物になるのかなという不安な思いもある。重視することは、将来が続くかどうか。ここでぷつと切れないということが大事で、それは単に経済的な生活だけではなく、それよりも研究生活をどこかの大学や研究機関で続けていくことができるのか、学問の世界に自分がなじんでいけるのか、精神的・体力的なもの、究極的には職があるのかななどを考えているという。この例でも「職」は研究生活を続けていく場としてとらえられているのがわかる。

ここでは十分に触れる余裕がないが、Kさんのケースでは調査や研究の実相が生き生きと語られていた。研究の中に自分を体現していき、「プロの 学者でやっていく」ことを目標としているという表現から、「研究者」は結果としてついてくるものであることが暗示される。「研究者に『なる』」ことが到達地点として目的視されている次の で検討する研究者像とは対照が際立つ。

「職業」としての研究者

とは対照的に、「研究者になる」ことが到達目標である研究者像は今回の聞き取り調査対象者に複数見られた。このタイプの語りにも共通しているのは、職業としての研究者つまり大学教員になることが目的化していること、また、博士の学位がそのための要件と目

されていることである。

Gさん(博士1 3年・20代・男)は自分の生活に根付いた問題関心から専門分野をジェンダーの視点から考えるようになり、このテーマ研究することによって社会に貢献できればと考えた。より研究を深めるために修士課程に進学し、さらに研究者になるために博士課程に進学した。学部4年で大学院進学を考えた段階で研究者になろうという意思があった。彼は将来のことを「基本的には大学の研究者として就職したい」といっている。ここで「大学の研究者」とは「大学教員」を指している。「今後は博士論文執筆と、就職先を見つけるということを両立させていく予定」であるといい、この場合の「就職先」は「大学教員」のことであると確認された。つまり、この場合「研究者」は「大学の教員」と等価で一つの職として「就職」という概念の中に位置づけられている。そして博士論文執筆ないし学位は大学教員という就職の一つのステップとして位置づけられている。

Eさん(博士課程4 6年・30代)は夫が支援してくれることについて次のように話している。たぶん、普通の会社員の妻とは違う。それこそ、いつかは研究者になるという期待がなければ投資できない。やみくもに勉強したいからと投資はしないと思う。「この人は将来学者になるんだ」と思ってくれるから支えてくれるのかと語った。ここでも「研究者(学者)になる」ことが到達点として認識されていて、それは「投資」の対象になっている。彼女は企業等である程度のキャリアを積んで出産した友人と自らを比較し、「私などはまだ博論もあるのよ、あたふたあたふたという感じ」と、博士論文はやはり必ず超えなければならない課題として意識されていることがわかる。

このような位置づけをしたケースは複数あり、珍しいものではなかった。Nさん(博士課程1 3年・20代・男)は「研究者になる」つもりで進学したが、研究者にこだわっているわけではないと語った。将来の進路について、研究者に限らず、就職できればいいと考えている。彼は研究者の就職の厳しさは入学前から知っていて、修士から博士課程へ進学する際に少し悩んだがここまできた、と言っており、研究者は就職の際の選択肢の一つとして位置づけられている。ただし、この場合「研究者」は必ずしも大学教員を意味しているわけではないようだ。Rさん(修士・20代)も高校生の頃から研究者になりたいと思っていた。学部から進学するときに「研究者になるためには博士号も必要なので、修士課程に進学した」と語った。テーマの関心から、「大学の職員として数年現場で働いてみたいという思いもあるが、その場合も最終的には研究者として戻ってくるのが目標だ」と語っているようにやはり「研究者」は大学教員を意味し、そのための要件として博士号が位置づけられている。

これらの例からみえてくるのは研究それ自体が自己表現であるというよりも、「研究者になる」すなわち大学教員として職を得ることが目的化していて、研究はその手段として考えられていることである。その際に博士の学位がその要件と考えられているが、これは90年代以降の大学院重点化政策を受けて、近年文系でも課程博士としての学位取得が優勢

を占めるようになり、公募の際に博士号取得が条件化されていることを背景として考えることができる。

常勤の大学教員として就職することが「研究者」であるという発想では、非常勤講師は「研究者」の範疇からはじかれる。Wさん(博士課程4 6年・30代)は研究をすることが結婚や他の職と選択可能なものとして語っている。「結婚しても研究を続けるかはわからない。これまで正直何も考えないでやってきた。今年3月に籍(学籍)が切れるということで、途方にくれているところです。数年非常勤をやって就職するとしても、その数年がもう精神的にもつか自信がない。その際に本当にずっと非常勤の人もあるし。ちょっと仕事ないかなあと思って、キャリアセンターにも行ってみた」と語っているように、非常勤講師は「研究者」の範疇から除外されていて、他の仕事と同じ水準に位置づけられていることがわかる。

また、これらの語りでは、大学教員になることは強く意図されているが、「教員」の内容として「教育」ということが出てこない点にも特徴がある。後進の育成に当たるという意識が教員のもう一つの側面として出てこないこともここで強調しておきたい。

本節で検討したケースでは大学教員として就職してパーマネントの職に就くことが「研究者」であり、「研究者」は到達目標として意味づけられている。その際に博士の学位が必要な資格ととらえられており、到達目標としての研究者像がこの聞き取り調査から一つの類型として浮かび上がってきた。

「学問する場にいる人」としての研究者

、 の「研究者」の活動の場がアカデミーであるのにたいして、 はむしろ現場での実践を重視する点に特徴がある。これは最近の大学院の流れ、すなわち社会人(または社会人経験者)入学の増加、あるいは専門職大学院の設置と関連しているだろう。教育学研究科における教員経験者(A、Cさん)、企業での勤務内容を発展させる目的での入学(Lさん)などがその例である。この場合上記、 両方の意味を含んでいる場合がある。

Cさん(博士課程)は教員をしながら研究をしている。修士課程に入ったのは現職教員対象の大学院が開設されたのを新聞で知ったのがきっかけだった。仕事上の困難な状況を打開し活路を見出したいという動機もあったという。修士課程を修了しても十分な達成感を得られなかったために博士課程に進学した。将来は「自分の経験を活かして教員養成の仕事がしたい。しかし、教員をしながらの研究には限界があり、機が熟したら教員を辞めることを考えている。」と語る。Lさん(博士課程1 3年・30代)は、この先研究者としてやっていくのも厳しいとはわかっていたので、できるだけ若いうちに、気持ちがあるうちに大学に戻りたいと思って進学した。研究者という仕事は大変だろうが、充実感も得られると思う。指導教授も女性で、ある意味モデルでもある。博士論文を書いて、「願わくば研究者で食べていく」ということを考えている。Lさんは現在も常勤の仕事を継続しており、

実務経験は将来役立つだろうし、現在も情報源としては重要なので、両立できるところまでは両立していきたいと考える。具体的には大学教員、と言っており、大学教員という研究者が収入の手段という側面を持つことを示している。

以上 ~ の「研究者」のタイプを検討してきたが、全体として共通しているのは、研究の足場として「学会」が出てこないことが一つの特徴として挙げられる。研究そのものに関する言及が少なかったのだが、 ~ の一例を除いて研究は指導教員や大学の所属研究室との関連において語られている。今回の聞き取り調査でみる限り、大学院生が自分の研究を学会ではなくんでいくというあり方が見えてこなかった。

最後に、研究者アイデンティティ ~ のタイプとの関連について検討しておきたい。3つのうち最も研究者アイデンティティ確立が困難なのは ~ のケースであろう。 ~ は「研究をすること自体」に、 ~ は「現場（実践）を知っている」ということにアイデンティティを築きやすいと思われる。 ~ も本来は ~ なのかもしれないが、 ~ が気になってしまい ~ にならない。すなわち「研究をする『手段』としての社会・経済的自立 = ~」が「『目的』としての自立 = ~」に入れ替わってしまう人たちが大学院、助手、非常勤のレベルに多く、それが彼らに苦悩をもたらしており、支援が必要とされているのではないだろうか。

(2) 「ライフプラン」と「研究」

上述したとおり「就職」を軸として「研究者」像をみると到達目標としての「職」の概念の中に位置づけられる研究者像と、職はあくまでも研究推進の環境であって研究そのものに自分を表現していく研究者像、そして現場での実践を重視する研究者像を抽出することができた。

次にライフプランの中で研究者であること、あるいは研究者になることが何を意味しているのかを検討していきたい。回答には女性が出産・育児と研究の選択を強いられていると感じているという語りが見られた。

Bさん（修士・20代）は将来は大学の教員をしながら研究に携わっていけたら、と考えているが、「先生のほうからもやはり6年の間に学位論文を書いてドクターの学位をとるのが望ましいということをおっしゃるので、結婚はするんですけど、出産ということになりますと、数年、あるいはもうちょっと、研究のほうを優先させて、ドクターの論文のめどがつくか、あるいは学位を取得したあたりでまあそのあたりのことは考えようかなと思っております」と、優先順位をつけている。

Pさん（博士13年・20代）も、選択を迫られていると感じた。「研究職を選ぶかどうか迷ったときに結婚・出産ということも考えた。やはり、（企業などの）仕事だとそんなに大変でないところだと両立できると思うが、研究職だと自分では両立できないだろうなと思った。それで研究職は辞めようかなと思った。これまで友達に会う時間も気持ちの上

で取れなかったくらいなので、家族のために時間をとることもたぶんそんなに取れないだろうと思う。それに、研究は会社と違って時間が決められていないので、よく言えば好きに時間が使えるけれども、悪くするとどの時間も研究していなければならないので、ちょっと研究以外のことに時間を割くのが難しいかなと思ったので。自分が研究を継続する場合、家族は諦めなければならない、そうは思いたくないのだけど、みんなと切磋琢磨していくと決めたら、結婚とか出産はどうかなと思ってしまう」と語るように、研究職と家庭の両立という課題の解決を迫られていると感じていることがわかる。Fさん(博士課程13年・30代)も見聞として「周りにこの人きつと優秀な研究者になれるのに、出産で(研究から)身を引く女性がいた。もったいない。そういうケースは少なくない」と語る。

Gさん(博士13年・20代・男)は見聞したこととして次のように話した。院生結婚すると経済的な理由で二人ともに研究を継続していくことは難しく、どちらかが研究を断念、あるいは先延ばししなければならないことになっているようだ。それは男女関係なく、その時点でポストに近いほうが研究継続を優先されもう一方の方が一時的にせよ研究から離れて生活を支えることになる。どうしていいかわからずにその時点での結婚をあきらめることになっている。大概どちらかが就職してから結婚することになっているようだ。また、研究者として就職しても場所が離れてしまうこともあり、単純に就職すれば結婚できるということでもない話す。研究者、ないし研究者を目指す大学院生が研究と結婚の板ばさみになり最悪の場合研究または結婚を断念する例があるというのである。

以上のように研究者にとって研究と家族が選択を迫られていると感じ取られているという例が、特に出産を体験する女性研究者にあることがわかる。そして最悪の場合どちらかを断念してしまうこともある。

このような研究者への支援策のあり方も話された。Gさん(博士13年・20代・男)は「そのような、就職・研究・結婚という院生同士では解決できないようなことを相談する窓口があればいいと思う」と話した。Eさん(博士課程46年・30代)は英国への留学中の体験談として、英国の事情を話してくれた。イギリスでは女性研究者が圧倒的に日本より多いし、しかも権力のある女性研究者も多くて、出産やライフサイクルに寛容だ。妊娠がわかったときも、それじゃ研究が少し遅れても仕方ないね、みたいな寛容な態度で接してくれて、安心できる。出産、妊娠というのは女性の研究者として当然通る道だし、先生たちもなれている。向こうで妊娠がわかったときも、それは当然のことだからサポートも当然だという態度で接してくれた。

イギリスの例からは、出産が女性に特有の、選択を迫られて解決すべき問題ではなく、どの女性もが経験する可能性のある当然の出来事だという共通認識が重要であることが伝わってくる。女性ひとりが研究者か家庭か、どちらかの選択をせまられるような事態にまで追い詰められることは、なんとしても避けなければならない。さらに言えば、結婚して家族を持つ、子どもを育てることとそれに付随する様々な予期せぬ突発的な出来事も、女

性だけが対処すべき問題ではなく、男女がともに経験し、それに対する責任をもっている、という共通認識が重要である。家族を持ったり親になることが研究者として選択したり解決したりすべき課題、排除すべき問題ではなく、当然の出来事として受容する体制を整えることが求められている。

3-3. 理系分野における研究のあり方と課題

大学院院生の研究生活や研究環境は、専攻領域によってずいぶんと異なった側面をもつと考えられる。しかしながら、本院生聞き取り調査では理工系のインフォーマントは20名中2名であり、理系分野の課題を十分に引き出しえなかった。そこで後日、当研究所の2名の理工系の客員教員（U・V）に聞き取り調査を行い、理系に特徴的な研究・教育のあり方について情報を提供してもらった。

ここでは調査データのうち、大学院生と研究に関連する部分を検討する。インフォーマントの2名は博士の学位を取得してから数年経過しており、1節・2節で検討した院生の研究への関わり方と比較すると、研究者としてより主体的に研究を進めていることが明らかであった。そのような研究に対する態度は大学院生とは異なっていたものの、2章で紹介した大学院生の聞き取り内容からは十分に読み取ることのできない制度的・文化的な研究・教育の特質を検討するには十分な情報を得ることができた。そこで語られた内容から理系に特徴的な実情を紹介しながら、(1)研究室のあり方、(2)研究室・学会における若手研究者の育成、(3)実験系の研究者に特徴的な問題という3つの課題を検討する。

(1) 研究室の構成

まず研究室の構成で特徴的なのは、「理系って研究室のピラミッドをうまく作って何ぼというところがある」（U）という言葉に象徴されるように、教員を頂点としてその下に博士課程、修士課程、学部生と層を成す研究室単位でまとまった研究・教育体制が組織されていることである。「基本的に指導の中心となっているのは院生。先生は全体を統括していて、細かい研究の進捗は院生が指導する。先生も院生を信頼している」（V）「修士で出て行く人や卒論の人は助手やドクターが中心になって指導する。先生は君たちも勉強になるからいい指導をするようにといわれる。全体の指導は先生が統括している」（U）という二人の言葉がその組織を物語っている。しかも、これはこの2つのケースに特殊な例ではなく、研究科全体で一定の経済的保障もなされているものであるようだ。「院生は必ず全員が何かしらのTAについているので、院生自体は勉強になってる。院生になった時点で修士は有給のアルバイトでTAになって研究に組み込まれていく。理工全体がそうなると思います。ドクターは今度はマスター指導ということで全員が年間10万円とか入ってくるんで。それはやっぱり理工全体でドクターが研究室の中で果たしている役割」（V）と位置づけられる。また、下級生を指導することで博士課程の院生が自分の勉強にもなって

いるという点も注目すべきである。

また、この研究室という一つの大きなテーマを共有するシステムの中では、大学院生の研究費も教員との共同研究という形で補填されている点も特徴的である。「分析費用は共同研究という形で概ね無料になることが多く、また出張費は先生が研究費から出していただけなので、金銭面でもさほど困ることはない。フィールドに出かけるにはかなりの出費になるがその場合でも先生がきちんと研究費の費用を回してくれるので、そういう意味での先生の配慮があって困ったことはあまりない」(V)と語られるように、高額な費用がかかるフィールド研究や分析費用は研究室全体での費用としてまかなわれることが多い。「先生のほうでも年度初めにこれだけ研究室のメンバーが入ってくれたので頑張っ研究費取らなきゃって気持ちになっておられるし。1回フィールドに行っちゃうと一人につき20万くらいかかるけれどそれ(フィールド)をしないと研究が進まないことを先生も知っているし、それは別として研究費はちゃんと出すし。もちろん全額は出ないで半分くらいだけど、先生の気持ちというか。それはうちの先生が特別というわけではなく、学会全体でも資金があまると若手の研究者を育てていこうという話が出てくるので、やっぱり全体的にそういう考え方が浸透していると思う」(V)という言葉に表れるように、若手研究者の育成は態度や精神や方法論だけでなく、研究費の面にも及んでいることがわかる。また、次節で触れるが、これは個別の教員によることではなく、学会全体の文化であると語られている。

上級生が下級生の面倒を見るというシステムは勉強・研究に限られるわけではなく、それ以外の生活上のさまざまな相談にも乗る場合がある。「院生、特に博士課程の院生は例えば後輩の研究の指導をしたり生活上の相談に乗ってあげるなど、研究室の中で研究をする以外に明文化されてはいない役割が当てられていて、研究室システムが機能していくことになる」(V)というように、とりわけ研究室や実験室で共有する時間の長い実験系の研究室では、生活面も含めて面倒を見ることになっている。また、理科系は女子学生が少なく、教室によっては女子学生だけの会があることも話された。「教室ができて40年くらいになるが女子がほんとに少なかった最初のころの先輩たちが「女の子の会」というのを立ち上げてそれが今でも続いている。入学式の後、先輩たちがお祝いや経験談を話したりする伝統がある。試験前には女子学生だけ過去問が回ったりして最初はそれほど意識もしていないが、院に入っているんな相談をするときなどネットワークが役に立っていると思う」(V)。

このように、研究室そのものが課程によって層化された指導体制を組織して機能しており、大学院生がその中で果たす役割も大きく、指導力が期待されていると同時に自分たちの研究者としてのスキルアップにもつながっていることが一つ目の特徴として挙げられる。また、そのような研究室の機能的な構成は研究の側面にとどまらず、生活全体をもカバーしている。それは特に実験・分析系の研究室では研究室でともしる時間も長いことにも

よる。また、女子が少なかった時代から脈々と受け継がれた「女の子の会」の存在も語られた。

(2) 若手の育成

本節では若手育成に関わる文化について検討するが、最初に U、V の二人の若手研究者が研究者として歩んだ経歴を概観しておく。

U は高校時代に自分の専門領域に関心を持ち、大学に進学したときは教員になるか就職するつもりだったが、こんな実力では私は教えられないと思い、修士課程に進学した。最初から何が何でもというのではなく、もう少し勉強したいなあというのが動機だった。研究者になろうと思ったのは D2 のときに今の先生に変わってから。それまでは先生の言う言葉が難しすぎてわからなかったが、先生が変わってから少しわかるようになって力づけてもくれたので安心してやっていくことができた。論文が一本形になると面白くなってこのままやっていきたいと思うようになったと語る。博士課程で指導教員によって研究の面白さややりがいに目覚め、それから研究者を目指したのである。

一方、V は中学 3 年のときに関心領域は固まった。学部で先生につく段階で修士課程まではやろうと思っていた。修士のときに専門領域での就職が困難だったので博士課程に進学した。就職するなら専門職だと思っていたが女子は難しかった。博士課程に進学する際は、行くからには研究職を目指そうと思った。先生にもきちんとやり立てて研究をやっていけるようにがんばれと、そのときは珍しくきちんといわれて、覚悟はした。でも進んでみたらわかる辛さもあった、と語る。修士課程終了時に就職差別で進路変更して研究職を目指している。つまりこの 2 つのケースでは、博士課程に入学時か入学後に研究者になろうという意志を固めたことがわかる。

教員の指導はそれぞれ博士課程に入ると独立した研究者として処遇されることが語られた。「博士課程上級生と先生の関係は課題を見つけて結果を出したものを先生に見せに行き指導を受けるという関係。一人でやって一人前なので、できないときは相談に乗ってくれるがなるべく一人でやるようにということが重視されている。学会の前は一度目の発表の前はここはこうした方がいいとか細かい指導をしてくれるが、それを二度目三度目となると独立した研究者として処遇され、もういいよと言われる。先生と同じ専門だが、できれば違うテーマを見つけてやってくれというお気持ちだ」(U)、「うちの先生もやり立てできる研究者を育てるという思いがあるので、なんでも自分でできるようにという、手取り足取りという指導ではない」(V)という、できるだけ早く独立させようという指導の姿勢があるが、その背景には「先生も学問的に優れた方で尊敬もしているが、先生が出された仮説どおりにいくことでは満足できないので、何とか先生の仮説とは違った結果を出すのが目標みたいなところがある」というように、同じ領域の研究者として指導者を越えていくことを目指す大学院生たちの志も感じられる。

若手の育成、支援では前節で検討した研究費の支援に限らず、学会への参加もまた奨励される。学会自体も若手研究者を育成することに熱心で、若手研究者同士の大学を超えた交流で研究を鍛え上げる様子が語られた。「学会の中で「若手の会」というのがあって若手の研究者が活発に活動している。例えばポスドクや非常勤を始めたくらいの研究歴の研究者がリーダーになって合宿をしたり研究会をする。大学を超えた交流がありそのことがその後の研究者としての交流の基礎となる」(U・V)。

また、学会への参加は研究成果の議論という研究内部の交流だけにとどまらず、専門とする学界で将来活躍するために自分を売り込む場ともなっている。「研究会への出席については先生のほうからお金は出すからちゃんとして行ってくださいと。研究集会に出して顔売っていくってということも研究活動の一部になっていて、だから、ずっと続けてやっていこうという子はそういうところに連れて行ってあげないと将来をつぶしちゃうことになるので、頑張って出て、他の先生にこういう子がいるって紹介していく。それも大事な指導の一つになっている。大学の中だけでなく、研究会や学会などで相応の役割を担わされ、研究者としてやっていく上でのスキルも磨いている」(U)という意味も持っているのだ。それは就職難を背景にしており、「就職は原則公募で一つの求人に 100 来るのは当たり前のことになっている。でも決まっていく人を見るとその大学の先生と仲がよかったりするから、だからこそ研究集会に出たり先生方に自分の研究をアピールしなきゃいけないというのがあって、だからこそ先生たちもいろんなところに連れて行ってくれるし、機会があれば今うちの子はこういう研究してて、発表させてくださいと売り込むし、そういうところは文系にはないんですかね」というのである。

(3) 理系(実験系)の研究者に特徴的な問題

実験室での研究

理系のなかでも実験形・分析系の研究をするものにとっては、設備が研究にとって欠くことのできない条件になる。つまり、研究室に「いる」ことが研究を進める上で求められるのである。実際に分析に携わる V は次のように話す。「実験系は、「実験室でなければ研究ができない」という時間的・物理的・体力的な制約がある。自分の場合は、フィールドに約 1 ヶ月はいい地質調査とサンプルの収集を行う。その後実験室に入るが、サンプルの調整には短いときには 2-3 週間、長いと 4-5 ヶ月から 1 年かかることもある。その後、平均的には 1 週間、長い場合は 1 ヶ月かけて分析を行ない、データを出す。他大の機器を使用する場合は 2-3 ヶ月かけることもある。この後データをまとめて論文にして投稿する。このようなスタイルは文系の研究者とは異なる」。

このように実験室という特定の場で同僚の大学院生や先輩たちとの協力のもとで研究するというスタイルは、研究そのものが設備に左右されることになる。実験室(研究室)に

時には長時間にわたって続けられることができるかどうか研究の成否に関わってくることもなる。

ジェンダーに関する問題

で述べた物理的な制約は、妊娠や出産、育児という自分の身体の変化を伴う生活上の出来事を体験するときに問題化してくる。また、実際にそのような体験をしていないにもかかわらず、出産の可能性のあるというだけで女性が男性にはないハードルを越えなければならぬこともある。「うちの教室はドクターに女性が3人いるが結婚して子供ができた段階でやっぱりほとんど研究自体やめちゃって。そういうのをみちゃってるので、結婚してもいいけど子どもは産んだらだめだよって言われたりとか、心配してだと思んですけど、先生にはそういう風に言われたりします。確かにきついとは思いますが、でも、ある程度両立できるんじゃないかと思いたいですけどね。やっぱり研究手法的に一ヶ月とかで一つの分析をするとかってというのは厳しくなりますよね。結婚までは想像できても、子どもができたらどうするのかっていうのは躊躇しちゃうっていうのが、想像できないっていうのがあります」というVの言葉には、実際に出産・育児との両立ができずに研究を断念した例が示されている。それと同時に、子供を産みづらい研究室の雰囲気というものも示されている。

出産・育児という人生の大きな出来事だけではなく、女性は実験やフィールド調査という身体的にきつい作業を伴う研究をしようとする場合、親切心に発する制約というハードルも越えなければならぬようだ。女性ということだけで「心配だ」とみなされて自分の関心のある領域につけなかったりする例がVの見聞として語られる。

後輩からテーマのことで相談される一番多かったことっていうのは自分はフィールド調査をしたくてここに入ってきたのにフィールド調査ではない手法を勧められているということ。（自分の研究分野では）必ずしも全ての人がフィールドに入ってサンプルを採ってきて調査をするっていう事だけではなくて、元々あるサンプルを使うっていう手法もあるんです。

女の子が入ってくると、先生も心配だし本人も心配だろうし親も心配だろうから、っていうので、あえて最初からフィールドに入らなくて済むようなテーマを先生のほうで用意してあげると。フィールドに入らないという事で不利になるということはないので、先生のほうは親切心からなんだけど、フィールドに入りたいという気持ちの女の子もいるということでギャップもある。一人でフィールドに入ると男の子も女の子も泣いて帰ってくることもあるんだけど、女の子の場合はやっぱりという感じで心配されることが多い。（V）

実際にはきつくて怖いのは男子学生も女子学生も同じことであるにもかかわらず、男子学生が泣いて帰ってきた場合は等閑視され、女子学生の場合には「やっぱり」と心配される。この「女性」に対する先入観は研究上の様々な箇所で見られる。

先生の意識を変えることも大切だと思う。やっぱり女の子だからって意識を持った先生がいっぱいいる。修士まではやる気ではいつてきた子も、君は女の子だからって扱いで、やっていけないのかなていうふうに思っちゃったりする子もいるみたいなんです。成績だけみると変わらなくても先生の中には男の子を残したいっていう意識の先生がいて、どうしても。実験系は体力勝負で女の子には危ないから帰っていいよって言う、危なくないような環境を作ってあげた上でどうにかってということだと思うんです。(U)

おそらく教員の意識に関する問題は、理系・文系を問わず遍在している問題であろう。その中でもとりわけ実験・分析系の領域は物理的にきついことも多く、よりジェンダーのバイアスがかかりやすくなっていることがわかる。危険だからという理由で「親切心」から研究の場から遠ざけるのではなく、まず危険を除去して研究の場を確保することが先決で、その上で本人の意思を確認すべきだというUの意見は、若い研究者を育成する場において傾聴に値するものである。

出産・育児の乗り越え方

きつい実験系に限らず、研究と出産・育児を両立できずに研究を断念する例を2)で検討したが、それを打開する方法はないのだろうか。U、Vはそれぞれ自分の研究スタイルから、解決策を提案した。それは簡潔に言えば、一つには研究スタイルを一時的に変更するという方法であり、もう一つは補助員をつけて研究を分担するという方法である。

Vは実験で長時間機械につかなければならない分析手法が困難な時期は、「シュミレーション」というコンピュータの計算による手法を取ることも可能だと示唆する。また、時間のかかる分析作業をひとりで進めることが困難な場合について、「分析関係で言えばそれこそ実験補助員とか研究補助員ですね。例えば私の関係でいえば研究室で卒論生を一人つけてもらうということで解決できることがあるんですね。実際時間をかけて機械に張り付いてやる分析作業を、データを出してもらってまとめを一緒にやるとか、分析の指示はこちらから出すけれども条件とかにしたがって実際にデータを出すのはその子達で、そうになるとやっぱり実験補助員一人つけるだけで違うなって思うし」と提案する。

また、Uは理論系の研究をしているが、同様に「例えば育児中・介護中はコマ数を減らすとか、すごくだいじだと思っんですよね。非常勤とかでも、アシスタント一人つくだけでも全然違うと思うし。やってるほう(院生)もそれで勉強にはなるし」、「その[出産・

育児で困難な]ときにちょっと手を差し伸べてくれる人がいれば助かるし、そのときにうまく共同研究者が見つければクリアできるっていう形ですよ。数学って原則的に一人でやるんですけど、細かい計算をやってくれたり、論文にまとめる作業っていうのを分担できる人がいるとやっぱり全然違うので、助けてくれる同業者がいると乗り切れるっていうのは普段から聞いている」と述べる。

研究を共同研究者とともに、補助員とともに進めることによって困難な時期を乗り切るという発想は、研究室が一つのまとまった研究・教育の場として機能している理系ならではの発想ともいえるだろう。単に作業を手伝ってもらおうというのとも異なり、その補助作業そのものが後進の育成の機会ともなっていることは注目に値する。

進路の問題

進路に関する問題は理系においても深刻である。理系では博士課程を修了することは博士の学位を取得していることを意味する。したがって「ポスドク」という名称であらわされる、博士号を持ちながら求職と研究を続ける若手研究者が増加している。このような背景の中で、継続的に成果を発表し、また、学会・研究会でも就職の意思のあることをアピールし続けていくことは最低限必要なことである。教員も若手研究者の教育の最終段階として学会での売り込みに力を入れることが語られる。「就職は原則公募で一つの求人に100来るのは当たり前のことになっている。でも決まってしまう人を見るとその大学の先生と仲がよかったりするから、だからこそ研究集会に出たり先生方に自分の研究をアピールしなきゃいけないというのがあって、だからこそ先生たちもいろんなところに連れて行ってくれるし、機会があれば今うちの子はこういう研究してて、発表させてくださいと売り込むし、そういうところは文系にはないんですかね」(U)。もちろん次節で考察するとおり文系においても就職難という問題は極めて厳しい状況にある。文系での就職難への対処が個々の研究者ごとに行われていると語られたのに対して、理系では研究室を母体とした教育・研究者育成の一環として位置づけられている点が両者の相違点であることがわかる。

以上のように理系の研究分野では研究室単位の研究・教育システムの確立と、研究スタイルによる制約、そして博士の学位を早くから授与してきたことが特有の研究文化を醸成してきたといえる。本節では便宜上「理系に特有な」、という表現を用いたが、逆の見方をすると文系では、研究室にとらわれない個々の研究者としての研究スタイルが推奨され、研究遂行上の場所や時間や身体的な制約は比較的受けにくく、博士論文は個人の研究史の集大成として執筆されるという文系特有の文化があった。総合大学である本学で若手研究者の支援を行う際には、そのような研究文化の差異を十分に認識していく必要がある。

3-4. 不安定さと保証

次に大学院生が感じている不安について考察する。聞き取り調査では不安について語られることは珍しくなかった。語られた不安を整理すると 2 種類の不安要素を抽出することができた。一つは将来の職に関する不安であり、もう一つは出産・育児と研究の継続・両立に関する不安である。

(1) 将来の職に関する不安

複数の回答の中で研究職のポストが少なく就職が難しいことへの不安が語られた。その中には助手や RA のように一時的に安定的な身分や収入を得ている例も、そうではない例もあった。

Hさんは、研究職のポストの少なく競争率の高いなかで小さな子どもをかかえて就職活動をおこなっていくことの困難さを挙げる。

助手の任期は 3 年で、あと 1 年しかない。自分の研究科では助手の任期が終わると基本的には大学外にでなくてはならない。研究職のポストも団塊の世代が退職する 3 ~ 5 年後にはポストがあくとの噂もあるが、わからない。非常勤の口も少ない。民間企業で技術開発の仕事をするとも考えているが、子どもがいると、『私これだけできます！』というところを見せなくちゃいけないのに、それができない。それに民間企業に就職した人のなかにも研究職（大学教員）を目指しているかもしれないから、競争率は高そう。（H 博士課程 1 3 年・30 代・助手）

あまり就職先が開かれていない学問領域なので、先輩たちが未就職のまま残っている。それを身近に見ていると焦燥感や不安を感じる。わかっていたことではあるが自分の専門領域での就職は難しい。自分と同じくらいの業績の人でも就職できる人でできない人が出てくるので、周囲と比べて不安に思う。（G 博士 1 3 年・20 代・男）

就職できないかもしれない不安のなかで大きいのは経済的な不安定さである。現在助手や RA で一定の収入があっても、それが途切れたときの不安はつねにある。Qさん（博士課程 4 6 年・20 代・助手）は助手であるが収入を増やしたいと考えている。「今はお金に困っていないけど任期があるので貯金したい」と話す。Gさん（博士 1 3 年・20 代・男）も同様に「RA はプロジェクトの期間限定なので終了すると収入がかなり減ってしまい、蓄えを使うことになる。それを見越して PD 申請を通らなければと思っている」と、蓄えを減らしたくないと考えている。Lさんも、と経済的な不安定さへの不安を次のように語った。

将来、助手になるか仕事を続けるかという選択肢って今後あると思うんですけど。助手の後うまく専任講師になればいいんですけど、それってわからないことじゃないですか。何かお金を得る手段がないとそれこそみんな年齢も高くなってきて、あせりもあると思うので、そこが一番ネックかなあって。だから研究一本にも絞れないところがある。

助手の後ですぐに専任講師になる人はすごく恵まれたケースであって。研究者はとも不安定なので、現在の仕事を辞めちゃった後、「研究者の仕事に就けなかったらどうするんだろう」って不安も大きいので。それはまず自分がいい論文書けばいいんだろうけど。助手も35歳が応募締め切りなのでぎりぎり、でも助手っていう制度がどこまで安定感があるか、時間は十分使えるかもしれないけど、それも不安。一番不安っていうのはお金のところかもしれないですね。仕事を始めたときから学費はためてきたが、今は出て行く一方。(L 博士課程1 3年・30代)

Tさん(博士課程4-6年・30代)は「安定が保証された仕事」という表現を使った。他の箇所では「経済的安定」を強調しているので、「安定の保証」は「経済的安定の保証」を意味することがわかる。自分の経験から経済的な不安は単に経済的側面の問題にとどまらず、精神的不調を呼び、研究のパワーも落ちてしまうという。だが、一方で助手として「正規雇用で働く安定とか安心」という表現もしており、経済的安定と同時に身分の安定もそこに含意されているといえる。

以上の例からわかるのは、安定した職に就くまでのいつまで続くとわからない時間を過ごす不安は、経済的な不安定さと、精神的な不安定さによるものである。これは全ての研究者が通ってきた道であろうし、過去も現在も、男性も女性も共通しているものであろう。ただし、近年大学教員の新規採用が減少していることがあって、より不安感が増大していることは否めない。大学院を終了した後、本来ならば最も研究に没頭できる時期に経済的な問題に振り回されて研究に専念できない状況がある。この場合、例えば1年間博士論文を書くために研究に没頭できる期間が与えられるなどの措置があってもよいのではないだろうか。

(2) 出産・育児と研究に関する不安

出産や育児に関する不安、より正確に言えば出産や育児を経験することで研究の場に戻ることができなくなるのではないかという不安も、複数例語られた。

実際に産休を取って育児をしているHさんは、産休を取って出産したことについて「特に嫌味を言われたり、不快な経験はしなかったが、ただただ周囲もびっくり、どうしようという感じだった」と語る一方で、「(周囲に)迷惑をかける」という意識と自信喪失について話した。

産休中も周囲にいろいろ迷惑をかけたし、これからも何かプロジェクトをやるにしても、就職活動をするにしても、子どもがいて、何があるかわからないから、自分からすすんで手をあげられない。働く自信がなくなってきた。

研究がトーンダウンしているので、（自分以外の人で、出産・育児でトーンダウンしてしまう経験があった人には、トーンダウン後の）復帰の仕方を知りたい。（出産・育児等で）休学・退学したりしたブランクのある研究者の受け皿をつくってほしい。（H 博士課程 1 3 年・30 代・助手）

実際に何かあったのかどうかはわからないが、産休を取ったこと、子どもがいることが研究者としての自信を失わせているのである。

これから出産するかもしれない世代にも不安はある。K さん（修士課程・20 代）は次のように話した。

あまり深くイメージはできないが、少し子どもが大きくなったら復帰できたらいいなと思う。産んだら辞めるっていうのはやりたくないが、でもやっぱり子供は産みたいです。結婚している女性の先輩はいるが、子供を産んでという人はいない。安心して出産できる保障が欲しい。保障というか少なくともリタイアしなくてもすむ展望がほしい。まず、復帰できるというのがある。復帰したいときに「ブランクがあいたからもういい」と言われるのが不安。間があいたからもう辞めなさいとは言われたい状況が欲しい。確実なものはないだろうが、出産によって切られないという一縷の望みが見えていれば随分違うと思う。（K 修士課程・20 代）

彼女の不安は出産によるブランクでリタイアを余儀なくさせられるのではないかというものである。

出産という身体の変化を伴いながら長期間研究の場を離れ、いざ復帰、というときの二つの社会のギャップを埋めるのは最終的には本人であろう。そのギャップを本人だけでなくにでも埋められなければならないのではないかどうか、K さんは「保障」という表現も使っているが、少なくとも整えられた体制が情報として周知されているべきことであろうし、周囲の受け入れも整えられておかねばならないだろう。

企業での育児支援・介護支援のプロジェクトに関わった経験を持つ O さんは支援を受ける当事者だけでなく、周囲の人間たちとの気持ちのズレにも目配りが必要だと述べる。

研究者は究極的には一人でやっていかなければならないので、企業よりもチームプレーとしての問題は少ないと思う。それであっても産休や育児休暇をとった後で、大学に戻るときに不利がないようにしていかなければならないと思う。ブランクの間に

能力が落ちているような場合は仕方がないにしても、育児のための休暇から復帰したときにそのことだけで不利にならないようにということがある。とりわけ文系は理系の研究室単位のまとまりとは異なり、学生が一人ひとり独立して研究しているので、そうだと思う。女の人で小さい子供がいるからということで、もしかしたらよく休むかもしれないということではじかれないようにしなければならない。(中略)

自分の経験から、育児休暇を終えて復帰しても子供の病気などで突発的に小刻みに休まれると、仕方がないとはしても支える周囲の気持ちとしては、本人にも何らかの経済的な負担はあってもしかるべきかなあと思う。負担というのは経済的なもの、仕事におけるチャンスの両方が考えられると思う。(O 修士課程・40代)

Oさんは、「支援を受ける側とそれを支える周囲との気持ちのずれも当然想定されるもの」と話す。その気持ちのずれまで射程に収めた支援のあり方が検討されなければならないだろう。

出産や育児に関しては、聞き取り調査に先立って実施した「大学院生調査」の計量的調査の中で、大学教員を志望する理由として「時間的自由と家事育児の両立」を「とてもあてはまる」18%、「ややあてはまる」30%と合わせて半数近くが選んでいた。すなわち、大学教員という職には出産・育児と研究の両立が可能という点での期待が大きく、実際にこの課題が乗り越えられれば大学院生をとらえている不安の一つの山は越せるのではないだろうか。その意味でも出産・育児による休学・休職後の復帰およびその後の育児と研究の両立に対する支援が強く求められるであろう。

(3) 結婚と男女

男女と一緒に暮らし家庭を営んでいくとはどのような関係を築くことなのだろうか。聞き取り調査からは、ひとり女性だけが育児規範に苦しめられ、女性だけが子どもを持つ責任を問われているように感じられているありさまがうかがわれた。つまり、子どもをもち家庭を営むという男女の問題が、女性だけの問題として矮小化されていることを、ここでは問題としたい。EさんとBさんの二つの例をみながら、あわせて「養う」「食わせる」という表現を軸に男女という人間関係を検討したい。

Bさんは今年結婚するが、これまでの研究生生活をすでに教員になっている婚約者が支えてくれたと自覚する。だが、夫になる人もこれから社会人として忙しくなるので、様々な困難も自分ひとりで乗り切らなければならないと考えている。

今は交際相手がいろいろと相談に乗ってくれるが、これからは社会人として忙しくなっていくしあまり手を煩わせるわけにもいかない。最後は自分ひとりで決めなければならないことが多いと思う。自分ひとりで決めなければならないというときに相談

に乗ってくれる窓口が欲しい。例えば、自分のキャリアのために子ども一人置いてアメリカに行かねばならないということとか、遠方の大学でポストがあいた、チャンス、というときにどうするか、そういうときに、どうするって聞かれても、いや、わからないですねえ、どうしようもない、どうすればいいのかわからないっていうのが正直なところなんで。それは自分の親に聞いてもお前の心一つっていわれるのは目に見えている。(修士・20代)

このように Bさんは、子どもを持ち育てることを女性である自分だけで決めていかなければならないと考えているのである。

Eさん(博士課程4-6年・30代・助手)は昨年出産した。夫の家族の育児支援を受けて研究を続けている。平日は、自分が家事を担当し週末は家事、育児を夫に任せて、自分は外に勉強しにいたりする。研究は昼間に済ませ、家では研究しないと決めている。研究者を支えるパートナーへのヒアリング調査があるなら、主人が協力すると言っていたと笑う。「今は家族を巻き込むしかない」というように、状況が夫やその家族との関係を変えていくことも考えられる。

2-2でも検討したように、出産は確かに女性が自らの身体の変化として経験していくことではあるが、カップルとなり子どもを持つということ自体は女性だけが経験する特殊な問題ではなく、男性も女性も誰もが経験する可能性のある当然のことであるという認識が共有されなければならぬ。育児支援や復帰の支援は女性だけの特殊な問題に対する支援ではなく、男性も女性も同じように体験する一つの過程を支援するということにこそ、「男女共同参画」社会の支援のあり方があるだろう。

出産育児を女性の責任問題として解決を図ろうとする意識と通底する意識は、調査で聞かれた「食わせる」「養う」という表現からもうかがわれる。Nさん(博士1-3年・20代・男)は「結婚はまだ考えていない。まず自分で自活して生きていくことが一番。自分のめどがたったら考えるかも。」と話す中で「妻食主義・生活」という表現を紹介した。それは「妻に食わせてもらおう(養ってもらおう)」「男性の生活」を周囲でそのように呼ぶ。「それでいいと思う女の人がどれくらいいるのか。自分ならしない。それが女の人たちにとって幸せなのか」と話すが、ここに現れているのは男性の稼得責任に基づいた男女の役割分業規範である。同じ意識は女性の語りの何も見られる。「周囲でも結婚している人が少ない、男性の友人が多いから、今でも俺が食わせてやるまで結婚できないという男の子は圧倒的に多い。女性はそれにのっかって食わせてもらおうかということはある」(E 博士課程4-6年・30代・助手)という話に現れているのは、やはり男性の稼得責任に基づいた男女の役割分業規範であり、女性の育児規範である。

なかには性別役割分業を規範化した制度的なものに対しては反発しながら、生活の選好として役割分業を望む例もあった。Qさんは男女の役割分業規範を押し付けられたり規範に

従った生き方ということには抵抗するが、自分のライフスタイルの好みを以下のように語った。「個人的な話だが、家事や育児は全部自分でやりたい。基本的に家を守っているのは私だと思いたいから、結婚したいし、出産もしたい。完全分担制で人生のパートナーみたいなのは経営のパートナーと同じで、それならばわざわざ結婚しなくてもいい。誰かの女房というのにあこがれるから主婦になりたいのであって、やりたいこととしては、家のことをちゃんとやりたい」。私たちはここに語られるように、むしろ家庭のことがしたい、補佐的なことのほうが向いていると考えているタイプの人々のことも忘れてはならない。女性研究者支援の名のもとに何が何でも平等にという別の規範を強いることがないようにしなければならない。

喫緊の課題として目下困難を抱えている女性研究者を支援することが必要である。だが一方で、困難はひとり女性だけが責任を負うべき問題ではなく、男女ともに当然のこととして経験していく種類の過程であることを理解し、周知していくこともまた必要な施策である。その上で女性のみならず男女ともに支援していくことが、男女共同参画をうたう支援には必要な理念であろう。

(笹野悦子)

終章 提言

本章では、回答から大学院生がどのような支援を求めているかを考察し、大学としての支援のあり方について、とりわけ平成 18 年度文部科学省科学技術振興調整費、女性研究者支援モデル育成事業「研究者養成のための男女平等プラン」の一環として開設予定の「女性研究者総合サポートセンター（仮称）」のあり方についての提言としてまとめる。

1. 学内施設の整備

(1) 勉強できる場（研究用の個人スペース）の確保

研究科あるいは専門によって状況は大きく異なるが、勉強をする場、または荷物を置くことができる場のない大学院生にとっては切実な問題となっている。また、勉強場所があっても開室している曜日や時間の延長を求める声も見られた。

- 自分のデスクで研究するという環境が他の国立大学・・・と比較して整っていないと思う。ロッカーは 30 センチ四方くらいのものであるが、荷物の置き場所などは少々苦労する。（G 博士 1 3 年・20 代・男）
- （ドクタールーム）開室時間が午後 9 時まで。ゼミが終わった後使うことはできないので事実上使えない。日曜日も閉まっているので使えない。自分の机があると荷物や本も置けるので大学で研究できるようになる（L 博士課程 1 3 年・30 代）
- 院生の勉強部屋がほしい。今までは家、先生の部屋、喫茶店、助手室などで勉強してきた。（Q 博士課程 4 6 年・20 代・助手）

さらに、子育て中の大学院生にとっては、安心して育児から離れ、勉強に集中できる場の確保はより重要な意味を持っている。下記 A さんの記述にあるように、「子どもを預けながら勉強できる場」の提供も、大学院生に対する育児支援の 1 つとして考慮に値すると思われる。

- 子どもを預けてそのそばで勉強できるところがあるといい。荷物を置いて、時間を区切って、勉強できる個室と子どもを預けるところがあればいい。子どもは荷物が多いから。図書館はうるさいし。（A 修士・40 代）
- 大学で勉強する場所がない。自分は家にいると家事をしてしまうなど他にすることが多くて集中できない。保育園に子供を出して大学に行って、そこで研究もしてそのあ

と子供とともに帰宅するというリズムのある研究生を送りたかった。(T 博士課程 4
- 6 年・30 代)

(2) 図書館の充実

(1)勉強する場としての意味をも持つ図書館に対して、運用のより一層の充実を求める声が多く挙がった。これには開室時間に関するもののみでなく、利用資格の拡大を求める声も挙げられた。

- 欲を言えば図書館が 24 時間いてほしい。(K 修士・20 代)
- 図書館の開室時間も延長して欲しい。ローカルな図書館は 5 時に閉まるのもひどく不便だ。(L 博士課程 1 3 年・30 代)
- 図書館の大学院生の貸し出し時間を 10 時まで延長して欲しい。(G 博士 1 3 年・20 代・男)
- 学籍を抜いた後でも年間いくらか決めてもらっていいから、図書館を使えるようにして欲しい。(Q 博士課程 4 6 年・20 代・助手)

(3) トイレ

さらに、学内施設に関して女性用トイレの数を増やす、または設置場所の改善を求める声が多く見られた。

- トイレが少ない。古い 16 号館の上のほうには女子トイレの個室が 1 つしかなくて不便。(A 修士・40 代)
- お手洗いは一つのフロアに女子用個室が一つだけしかないので、誰か一人が使用すると他の階に行って使わなければならない。(P 博士 1 3 年・20 代)
- 男子トイレは便利なところにあり、女子トイレは不便なところにあった。(R 修士・20 代)

以上、大学の施設に関しては、研究用の個人スペース、図書館運用の拡大およびトイレの改善等の要望が挙げられた。これらは予算等との関連もあり、早急を実現することは困難なものもあるであろう。しかし大学院生数が増加している昨今、彼らの声を汲み、環境を改善していくことは、魅力ある大学づくりの上で不可欠と思われる。一方現状では、大学院生の声が大学にうまく活かされているとはいえないという指摘もある。

- 助手になって、院生のための情報や予算が活かされていないことに気が付いた。自分1人では決定権もなく、先生方にゆっくり協議してもらえそうな時間もない。院生の研究と助手の持っている情報と先生方の考える環境・予算がうまく回っていないなあと思った。（T 博士課程4 - 6年・30代）

環境整備の重要性については、例えば最近、女性労働力の確保・活用に積極的な企業等において、女性従業員への配慮としてトイレを改善するケースも多く見られている。大学においても、設備環境の整備は女性研究者に対する支援の重要な一側面になりうるといえよう。

2. 相談室に求める役割と機能

当大学における「研究者養成のための男女平等プラン」の重要な柱の1つとして「女性研究者総合サポートセンター（仮称）」の開設・運営が挙げられている。ここに設置する予定の女性研究者支援のための相談室について、大学院生の描くイメージおよび要望等に関する記述をまとめた。

(1) 「ライフプラン」に関する相談窓口

大学院生にとっての学生生活は、研究者として就職するために研究に没頭し実績を上げるべき重要な時期であると同時に、結婚・出産といったライフイベントが視野に入る時期となる場合が多い。研究そして希望の就職をすることと結婚・出産を組み込んでどのようなライフコースをたどるのか、その展望や選択は彼らにとって深刻な問題となっている。

- 結婚はするんですけど、出産ということになりますと、数年、あるいはもうちょっと、研究のほうを優先させて、ドクターの論文のめどがつくか、あるいは学位を取得したあたりでまあそのあたりのことは考えようかな・・・mixiの女性研究者ネットワークなどで見ていると院生同士の結婚でどうしても女性のほうが犠牲になったり悩んだりしているようだ。表には出てこないが、早稲田にもそういう悩みを抱えている女性の院生は多いのではないか。研究室に男性ばかりなので誰にも相談できないで悩んでいるのではないか。（B 修士・20代）
- 総合的なライフスタイルの選択をするときに、子どもを預けるときにどうすればいいのとか、どういうことをすれば一番手際よくやれるのとか、そういうマルチ相談所みたいな、総合相談所みたいなのは欲しいなというのがすごくある。・・・女性研究者のライフスタイルに特有的に発生する問題として大学のほうで広く総合的に相談に乗ってくれるような窓口があったらいいなと思う。（B 修士・20代）

- 自分ひとりで（進路を）決めなければならないというときに相談に乗ってくれる窓口が欲しい。例えば、自分のキャリアのために子ども一人置いてアメリカに行かねばならないということとか、遠方の大学でポストがあいた、チャンス、というときにどうするか。（B 修士・20代）

このようなライフプランに関する問題に対して、身近に相談できる人やロールモデルの少なさを挙げる声もみられている。ライフプランに関する問題を、個人的な人間関係のみに留まらず相談する場所の必要性が示されている。

- 子どもを生んだのも自分の選択だし、（子どものいない）友人にも相談しづらい。誰に相談していいかわからない。・・・ロールモデルがないから、周りに相談する女性がない。女性教員は少ない（E 博士課程 4-6 年・30代・助手）
- 具体的にそういう経験（注：子どもをおいて地方や海外に赴任すること）をなさってそれを乗り越えてきた先輩方の、具体的なメッセージであるとかアドバイスがどうしても欲しいなっているのがあります。・・・モデルがないから。（B 修士・20代）
- 元々女性教員の数が少ないので、ロールモデルになるケースが少ない（R 修士・20代）

またライフプランの問題は、出産・子育てとの両立を中心に女性にとって深刻な問題となっているが、一方で男女双方にとっての問題であるということも忘れてはならないという指摘がある。先に行われた全数調査では、「女性研究者支援」をうたっていることで、男性を排除している印象をうけている大学院生が多くいることが示されたが、「男女共同参画」の理念から、男女双方への支援窓口としての配慮も不可欠といえよう。

- 院生結婚する人の相談窓口もない。院生結婚すると経済的な理由で二人ともに研究を継続していくことは難しく、どちらかが研究を断念するか先延ばししなければならないことになっているようだ。それは男女関係なく、その時点でポストに近いほうが研究継続を優先されもう一方の方が一時的にせよ研究から離れて生活を支えることになる。どうしていいかわからずにその時点での結婚をあきらめることになっている。また、研究者として就職しても場所が離れてしまうこともあり、単純に就職すれば結婚できるということでもない。そのような、就職・研究・結婚という院生同士では解決できないようなことを相談する窓口があればいいと思う。（G 博士 1 3 年・20代・男）

(2) 「進路・研学生活全般」に関する相談窓口

また相談窓口に対して、進路、あるいは具体的な研究指導以外の研学生活全般に関する相談を期待する声もみられている。まず進路に関しては、博士課程在籍者が就職を考えた際の相談窓口がない（わからない）という指摘があった。研究職としての就職が困難ななか、進路について悩み変更を考える博士課程在籍者も少なくない。このような時に相談できる窓口が必要となるであろう。

- 博士課程在籍者向けの就職、キャリア支援。キャリアセンターにも行ってみたが、学部や修士卒ぐらいが対象で、よくわかんないし。はっきり研究職じゃなくても、民間企業でも何かあればいいかなと思って。（W 博士課程 4-6 年・30 代）

一方、研学生活全般に関して、研究室や指導教員以外の相談場所を求める声がみられた。大学院生にとって研究室は研学生活の拠点であり、相談機能を担う場合も多くあり得るが、その反面、研究室以外で人間関係をつくり、そのなかで相談者を持つ機会が限定され、研究室内で相談できない内容を相談する場がないことに悩む者も多いと思われる。

- 十分な論文指導やゼミが機能していないと思う。学部の延長ではなく、お金と時間を割いてきている大学院生にそれはないんじゃないかなという思いは今もある。・・・そういうことを相談できる人はいない。（T 博士課程 4 - 6 年・30 代）
- 論文や研究の指導は教員がやるとしても、勉強以外のフォローは教員以外でもできる。とにかく話せる場、相談できるところが必要（M 修士・40 代）

以上、(1)ライフプラン、および(2)進路や研学生活全般に関する相談窓口へのニーズは、先に実施した全数調査においても示されている。進路（就職先）や将来のライフプランに関して「とても悩んでいる」と回答した大学院生は 30%を越えており、「やや悩んでいる」と回答した割合を含めると実に 60%以上にのぼる。このような問題に対し「今後適切な相談室があれば相談したい」とする希望は進路については 71%、ライフプランに関しては 58%に上っている。一方実際に相談室を利用したことがある院生は進路に関しては 8.6%、ライフプランに関しては 1.9%に留まっている。このような背景の 1 つとして、現在の相談室の対象が学部生に限定されていると感じるといった声も挙げられている。

よって進路や将来のライフプランに関する悩み等、従来の学内相談と重複するテーマではあるが、大学院生に特有の問題を扱う、すなわち彼らが自分達に対する支援であることを明確に認識できる場としての相談室が求められているといえよう。

(3) 「セクシュアル・ハラスメント（またはアカデミック・ハラスメント）事前相談」としての相談室

学内におけるハラスメント防止委員会および相談室の存在は、多くの大学院生に周知されていた。しかし現実には、その存在を知りながらも、敷居の高さを感じ相談に行くことを躊躇する声が多くみられた。よってセクシュアル・ハラスメントの相談に対してインターク機能を持った場が求められていると考えられる。

- つきまといをされた友人に対して、本人が他大出身ということもあって、ことを大きくしたくないという遠慮があってどこにも相談をしなかった（B 修士・20代）
- どの程度のことで相談に行ってもいいのかわかった。自分が悩んでいるときにいろいろ聞いて見ると他のところでも程度の差はあれ同じようなことが起きているのを聞いて、このようなことはハラスメント〔防止〕委員会に相談すべきことではないのかなと思った。（30代・女）
- 現在セクハラやパワハラに関していえば委員会があって相談できるようだが、なかなか相談しづらいのではないかと。もう少し気軽に相談できるような、いろいろな問題を雑談風に相談できるようにすれば気負うことなく相談できると思う。相談相手としては専門家が望ましい。相談室は物理的な場所として設けてなくても、メールなどで相談できればいいと思う。（G 博士1 3年・20代・男）

(4) 「育児・介護情報提供の場」としての相談室

育児や介護に関する具体的な情報提供を求める声が多くみられた。先の全数調査では、回答者の80%超が育児・介護と両立のための相談窓口を、研究職支援として有効であると回答している。さらに、現時点ですでに相談窓口を利用したいという回答も7%（約50名）、今後必要が生じたら利用したいとする回答が77%に上っている。このような高いニーズを裏付ける結果となっている。

ただし、育児に関する情報については、次項「交流会」を情報交換の場として期待する声が多くあがっている。

- 育児介護支援も歓迎。ぜひ利用したい。介護なども今後、当然ニーズがでてくる。親の具合が悪い人もけっこういる。それで進路を変えて就職した人もいる。自分も考えたことがある（N 博士1-3年・20代・男）
- 学生課に家族のことが相談できる場があってもいい。例えば、夕方から勉強したいと

きに子どもをみてくれるヘルパーを派遣してくれるところを紹介してくれたり。早稲田の卒業生やネットワークを使って、いろんな人を派遣できるサービスもありうる。

(M 修士・40代)

- 介護支援もこれから必要。家に帰ると義母の介護に疲れた奥さんに怒られる男性教員がいるかも。それに予防や緊急時の知識の提供も必要。(M 修士・40代)
- 先生方も家族の介護があると思うので、緊急の入所施設などがあると助かると思う。保育と同じように大学の支援があると助かると思う。いつまで続くかわからない介護のための支援、支援までできなくても何らかの相談窓口が必要かもしれない。相談と同時に様々な情報が得られたり、ただ話を聞いてもらえたりするだけでもいいかもしれない。(M 修士・40代)
- 子育て支援については広く理解されているが、高齢者介護についてはこれから先生方にも必要になると思う。いつ襲ってくるかわからず、いつまで続くかわからない介護のための支援、支援までできなくても何らかの相談窓口が必要かもしれない。(O 修士・40代)

(5) 「気軽に相談できるワンストップ・サービス」としての相談室

(3)セクシュアル・ハラスメント相談の項でもあったように、従来の相談室に対して「敷居の高さ」を感じており、より気軽に相談できる場を求める声が多くあがった。そのために、従来からイメージされるような1対1での相談窓口に限らず、電話やメールを使った相談などの提案もみられており、一考すべき点と思われる。

- 相談窓口は「行かなければならない」と思っていきようだと行きにくいので、なるべく敷居を低くして気軽に行けるところが望ましい。(M 博士課程1 3年・30代)
- 現在相談室があるのは知っているが、利用しにくいように思う。・・・保健室や相談室と構えられても行きにくいと思うし、反面近くて行きやすいところにあっても他の人に見られるんじゃないかと思って行きにくいと思う。(P 博士1 3年・20代)
- 相談窓口を利用しやすくするためには例えば、「0120」の電話番号のシールを学生に配布し、たとえ夜中であっても誰か相談窓口で対応してもらえるとということで有効に機能しうと思う。わざわざ出向がなくても良い、匿名で相談に乗ってもらえるというところは大きいと思う。(O 修士・40代)

- パンフレットなどに何かアドバイスを載せてもらったり、ネットなどもいいかもしれない。電話なんかもいいかもしれない。気軽にできるような形になっているのが望ましい。(P 博士1 3年・20代)

さらに気軽に相談できる場として、専門家による相談でなく、大学院生同士の交流の中での相談という形が浮かんでくる。このあり方については次節「交流会の実施」において考察する。

- 相談相手は、専門家の方が専門的アドバイスは得られるかもしれないが、気軽に行けるという意味では気さくに話せる相手でもいいと思う。院生のサークルみたいな形でもいいと思う。(P 博士1 3年・20代)

一方、相談室に「ワンストップ・サービス」の機能を求める意見もある。先に挙げた「育児・介護支援情報」を中心としたワンストップ・サービス体制は、上記の「気軽に相談できる」場をつくる上でも有用と思われる。

- 常駐でなくても困ったときに相談して、どこへ連絡したらよいかを教えてくれるような場所があるといい。できれば24時間で誰かいると理想的。常駐してなくてもいいので、不在の時の対応を用意して、とにかく電話する場があること。困ったときに、早稲田大学が責任をもって紹介するなり、どこへ連絡すればよいかに関する情報をストックして提供すること。(M 修士・40代)

最後に、相談室に関して不安や否定的意見があったことも付記し、相談室運営においては考慮すべき点としたい。

- 相談内容が漏れてしまうのではないかと不安があって相談には行かなかった。(30代・女)
- 相談室：愚痴をきいてもらうだけ？になりそう。具体的な解決にならない。(博士課程1 3年・30代)
- 何を相談するのかわからない。心のサポートよりも経済的な支援を。セクハラや女性のことは難しいから、それを十全にできるスタッフを揃えられるわけない。へんなことに介入するよりもお金を出すほうがいい。(Q 博士課程4 6年・20代・助手)

3. (相談の一形態としての)交流会の実施

前節において「相談室」のあり方について整理したが、相談機能、情報提供機能の最も「気軽な」形として大学院生同士、あるいはロールモデルとなる人を囲んでの「交流会」を要望する声が多くみられた。

(1) 若手(あるいは女性)研究者同士としての交流会

大学院生同士、特に女性大学院生同士の交流会を期待する声は多く挙げられた。普段研究室といういわば縦割りの組織単位で研究・活動している彼らにとって、横の関係、すなわち同じ大学院生(特に博士課程)同士、特に女性にとっては同性同士の間関係が少ないことも多い。そうした彼らにとっては、自分と同じ立場の大学院生がどのような事を考え行動しているのか、知りたいところである。自分の研究テーマに特化した話でなくとも、研究や就職についての情報を交換したり、人間関係を広げたいという期待が高い。特に隣接領域の大学院生同士の交流を求める声が見られた。また、女性研究者のロールモデルやメンター的な存在との交流にも期待が寄せられている。

- 学内での院生同士のコミュニケーションが非常に疎遠であり、博士課程の友人がいない。近接領域の同じ博士課程で他のゼミの人と何かちょっと話をしたいと思うが、どんな人がいるのかもわからない。ちょっとしたコミュニティなどがあるといいと思う。取り立てて研究の話といわなくても学会の話とか、ちょっとした刺激を得たいと思う。(M 博士課程 1 3年・30代)
- 他のゼミや研究科の方と話す機会があると、(気持ちも)すっきりするし、(研究)計画がたてやすくなる(W 博士課程 4-6年・30代)
- ネットワークがあればいいと思う。特に新入生を迎える体制があるといいと思う。ネットのコミュニティがあるといいのかなとも思う。論文を書くときの情報とか、勉強会や研究会の情報などを共有できるといい。先輩から研究者としてやっていく上での情報なども知りたい。(M 博士課程 1 3年・30代)

さらに、交流会によって研究領域を越えた大学院生のネットワークができることにより、彼らの研究環境等について共通認識ができあがり、さらにそれが彼らの「声」として研究環境の改善に寄与することも期待される。

- 女性教員のネットワークはあると聞かすが、大学院生はないと思う。女性の院生の数が少ない分、普段細かいことでディスパワメントすることも多いと思うので、簡単にアクセスできる場があればいいと思う・・・女性の研究者志望の人を支援できるような

講演会やネットワークがあればいいのかなと思う・・・アカデミックな環境全般にかかわるようなネットワークを研究科の垣根を越えて構築するといいと思う。個人ではなかなか動けないのでそのようなネットワーク構築に大学が動いてくれるといいのではないか（G 博士1-3年・20代・男）

(2) 「研究と出産・子育てとの両立」に関する交流会

(1)で挙げた若手、女性研究者同士の交流会の中でも、特に要望の声が多かったのが「研究と出産・子育てとの両立」をテーマにしたものである。中でも育児中の大学院生にとっては、「生の情報交換や育児の悩みを共有できる場」として期待されている。一方これから結婚・出産を考えるという層にとって、「研究と出産・子育てを両立できるか」は今後のライフプランを展望する上で最も不安要因になっている。よって彼らにおいても希望は多く挙げられ、研究と子育て両立についてのロールモデルと接する機会が強く求められていることが示された。

- 女性研究者同士の交流の場、情報交換の場を定期的に設けてもらうといいなと思う。学内、学外、広く話ができるような場所があれば、女性研究者サークルのような場所があったら、託児所などの身近な情報も交換でき、悩みも共有できるし、いいんじゃないかと思うんですけど。（B 修士・20代）
- 保育園のこととか、必要なときに、必要な情報を入手できる機会、こうして話せる機会があるといい。出産・育児の経験者や育児と研究を両立している人の話が聞きたい。（E 博士課程 4-6 年・30 代・助手、D 博士課程 1-3 年・20 代）
- いろんなレベルの相談窓口があるとありがたいが、研究活動の方向性、産んだあとの復帰の手続きはどうするのか。ステップアップの方法、少なくとも今までの人はこうやっていますよという仕事面でのアドバイス。育て方や実際面でのアドバイス、特に同じ研究者仲間ですべて育てている人達の話し合いの場などがあると心強いと思う。ほんとに些細なことから相談できるといいですね。たとえば自分の学会発表の日に子どもが熱を出したときにあなたたちはどうしていましたか？みたいなこと。（K 修士・20代）
- 特に研究者という属性の人の集まりがいい。一般の働くママとはライフスタイルも違う（E 博士課程 4-6 年・30 代・助手）
- これから結婚や出産する人も、育児と研究を両立している人の話が聞きたい。（D 博士課程 1-3 年・20 代）

4. 出産・育児における制度の整備

大学院生が実際に妊娠・出産する場合、現在どのような環境におかれ、どのような支援を求めているのだろうか。休暇等の制度面から整理してみる。

(1) 産休・育休制度について

産休取得に関しては、大学院生の中でも助手の立場にある者が経験している。産休・育休の制度自体は確立しているものの実際の取得者は少なく、身近に前例がない場合が多い。よって取得が本人の心理的負担となったり、周囲が動揺しているという現状にあり、制度の運用に関して配慮が必要であることが明らかとなった。

このことから、特に産休が自然なものとして受け入れられるような周囲の理解、さらに仕事に支障を来さないための業務調整等の配慮が重要であるといえる。現状では、これらは指導教員をはじめとする個人的な理解に負っていることが示されており、女性研究者支援の一環として全学的な共通理解となるよう働きかける必要があるといえる。

- 助手になるときにびくびくした。ちょうど子どもができたとわかったときに助手の採用が決まったので、いいのかなぁと思った。今までそういう話を聞いたことがなかったのでどきどきした・・・指導教授は「それでも堂々と産休をとればよい」と言ってくれた。それで結構安心した（E 博士課程 4-6 年・30 代・助手）
- （産休）最初は仕事の分担を他の助手に自分で依頼するよう言われたが、学年主任が「それはあなたの仕事ではない」といって、主任が仕事を割り振りしてくれた。自分では頼みづらいし、自分で頼んでいたら、ついついそれは自分でやると言ってしまったかもしれない。産休取得については、前例がないため、事務所の人もよくわからなくて、手続きに時間がかかった。（H 博士課程 1 3 年・30 代・助手）
- 産休や育児休暇をとった後で戻るときに不利がないようにしていかなければならない。（O 修士・40 代）

(2) 大学院生に対する休学等の支援について

(1)では助手という職に就く者として、いわば労働者に対する法的な保障がなされているが、一方学生としての大学院生にはこのような保障がなく、出産・育児が自分の今後にとって不利になるといった不安がより大きいことが示されている。学費等の金銭面、博士課程における身分の確保（休学期間の延長および休学・退学者の復学支援等）、博士論文提出期限の延長等が求められている。しかも(1)と同様に、制度面の整備のみならず学内に出産・育児といったライフイベントを積極的に受け入れ、支援する風土を醸成し、制度が効果的に運用されるよう働きかける必要があるであろう。制度の整備およびその運用を支援

する風土は、現在支援の対象となっている者のみならず、今後のライフコース展望に悩む多くの大学院生をエンパワーメントする効果があると思われる。

- 修士1年で休学して出産・育児をした。指導教員もとにかく辞めないで休学をするように応援して下さった。(T 博士課程4-6年・30代)
- (出産・育児等で)休学・退学したりしたブランクのある研究者の受け皿をつくってほしい。学費免除の休学制度があるといい。(H 博士課程1-3年・30代・助手)
- (留学先のイギリスでは)サポート体制もしっかりあって、学費免除の休学制度、1年単位で論文提出を先延ばしできる制度もある。(E 博士課程4-6年・30代・助手)
- 例えば、職についていれば、育児休暇とか制度的に保障されるものがあるが、今この身分だと、博論の提出の期間も延びないとすれば、制度としてはおかしい。(Q 博士課程4-6年・20代・助手)
- 結婚や出産を経験しても不利にならない制度作りが大切だ。出産してもブランクに関わらず現場復帰できるという保障がほしい。(K 修士・20代)
- 今のところ結婚の予定はないが、ゆくゆくは結婚・出産も研究も両方をやっていきたいと思う。それを考えると環境的には不利なのかなと思う。産休が取ればいいが、産休をとって少しでもブランクがあつたりすると乗り遅れるという感じもあって、出産の機会は減ってくるのかなという感じはする。(S)
- 安心して出産できる保障が欲しい。少なくともリタイアしなくても済む展望がほしい。まず、復帰できるというのがある。復帰したいときに「ブランクがあいたからもういない」と言われるのが不安。間があいたからもう辞めなさいとは言われない状況が欲しい。(K 修士・20代)
- 論文がどうのという問題ではなくて、出産も含めてやっていけるような制度にしてくれれば産めるわけで、みんなそれができないから。制度改革もしようとせずに、産み控えて、ああ産めない年齢になっちゃった、ああできませんというふうになって、あきらめるわけでしょう。(J 科目履修生・30代)

一方で、手厚い(手厚すぎる?)支援策には否定的な意見も、特に育児と仕事の両立を経

験してきた層からあげられている。

- 産休明けの復帰のときに、望まれる支援として ということが想定されているのだろう。どんな ことを支援してほしいのか。仲間についていけないからなんとかして というのは甘えのようにも思う。(C 博士 1-3 年・50 代)

出産・育児のみならず女性研究者の支援に対しては、多様な意見があることを忘れてはならないであろう。繰り返しになるが、制度の整備以上に、制度を全学的に受け入れ根付かせる、すなわち女性研究者支援の気運を高めることの重要性を忘れてはならないと思われる。

- 女性といっても子どもがいるかいないで意識に差もでてくるし、無用の傷つけあいなどを少なくするような、いろんな生き方があるということがお互いにわかるような環境ができたならなあと思う(B 修士・20 代)

付言すれば、育児支援と同様に介護支援についても制度面での支援を望む声も聞かれた。

- 介護休学などは自分にも可能性はある。休学で学費を半額支払うことについては、学生としてのポジションを維持するためには必要なのではないか。(O 修士・40 代)

5. 育児支援に求められるもの

前節、主に出産前後における休暇等制度面の支援に続いて、研究生活に復帰した後の育児支援については何が求められているのかを考察する。

(1) 保育所について

先の全数調査において、「学内保育所」を研究者支援として有効とする者は 87%と高い割合になっている。さらに利用希望者は、現時点でも利用したいとの回答が 6.7%(約 50 名)、今後必要が生じたら利用したいとの回答は 78.2%に上っている。また「病時病後保育」に関してもほぼ同じ割合であり、高いニーズが示されている。

一方、今回のヒアリングにおいては、保育所の定員増や料金面での支援を求める声が聞かれた。さらには学内の保育所ではなく、自宅近くでの保育への支援を求める意見もみられた。

- (大学には)保育所もあるので、もっと広く PR したほうがいい(L 博士課程 1 3 年・30 代)

- 大学の保育園も規模を拡大して、希望者全員が入れるようになるといい。(C 博士課程 1-3 年・50 代)
- 併設の託児所を作るなら、学生は学生枠で料金体系も別のものを作ってほしい。公立の保育園もいけないし、民間の託児所ももっとお金がかかるので、そういうところは無理な学生のための施設であったら、学生支援になるだろうと思う。(T 博士 4-6 年・30 代)
- 病時保育が大事だよねという話をしていた。親の緊張感が伝わるのか、一番大事なときに熱を出すことがあるので、自宅に来てくれるとか、徒歩圏じゃなくて遠くから通っている人には派遣で来てくれるような人がきてくれると助かる。(F 博士課程 1 3 年・30 代)
- 東西線の混み具合などを考えると、大学の保育園につれて来ることは現実的じゃないと思っている。(E 博士課程 4-6 年・30 代・助手)
- (認可保育園の入所基準に際しても)院生も職業訓練扱いにしてほしい。(E 博士課程 4-6 年・30 代・助手)

(2) 小学校以降の育児支援について

最近新聞等では小学校に入ってから育児支援を求める声も高まっていることが取り上げられているが、今回のヒアリングにおいても同様な声が聞かれている。

- 就学前の支援も大事だけど、それ以降も・・・小学校低学年は育児サポートの空白期間。1、2、3 年生までは大変。行政のサポートすらない(博士課程 1 3 年・30 代)
- 子育て支援では、保育園はいい、延長もあるし。小学校へ入ってからが大変(M 修士・40 代)

上記のように育児支援のニーズは実に多様であると考えられる。まず「子どもを預ける場所」いわばハード面の充実が必要であり、特に小学校以降という対象年齢の拡大が求められていることがわかる。しかしそれだけでなく、利用しやすさや支援の質などソフト面での充実が問われていることが示された。

一方、最近では少子化対策として自治体の育児支援も積極的に行われるようになってきているが、今回の調査ではこれを積極的に利用、期待する声はほとんど聞かれず、依然育児が

家庭内のもの、特に女性（子どもの母親、さらに援助者としての祖母）の手によるものとみなされていることが示されている。

- （自治体の）保育ママの制度も利用したが、近くに住む自分の母親の援助が大きかった。自分はただの学生でやってこれたのは奇跡的だと思っている。たいていは辞めるか、産むという選択を引き延ばしにするという人が多い中で、たまたまだとは思いますが、自分の母が応援をしてくれたので成し遂げられたというか続けられたのだと思う。（T 博士課程 4 - 6 年・30 代）
- 今は家族を巻き込むしかない。今はやっぱり。家族が使えないと重要な選択肢が欠けてしまうというか、なんか公的なものだけではやっていけない。江戸川区では 1 歳までは家庭で育てるべきとの考えから 0 歳児は受け入れず、保育ママ制度を利用する人が多い。でも問題がないわけじゃない。（E 博士課程 4-6 年・30 代・助手）
- なんとなく家の近くで祖父母がみてくれる幸運な状況にいるので、それを選んでいる。私はラッキーだから勉強が続けられている。（E 博士課程 4-6 年・30 代・助手）

上記「家族の支援が得られるという『ラッキー』な状況にあって初めて大学院生を続けていられる」という記述からは、逆に「家族の支援を得られない大学院生」に対して大学がどのような支援を行うかが、大きな課題となっているといえよう。有効な育児支援のあり方については、多様なニーズがあるなか本調査で絞り切れたとは言えない。今後も利用者および希望者のニーズを聞き、きめ細やかな対応をしていくことが重要である。

6. ジェンダーに関する意識の向上と意識改革

前述のとおり、女性研究者支援においては制度面の充実のみならず、制度の円滑な運用を可能にする風土が必要と考えられる。その際問題になるのが学内、特に大学院生を指導する立場にある教員側のジェンダーに関する意識である。ジェンダーに関する主に教員の意識について、得られた記述を概観する。中にはセクシュアル・ハラスメント、パワーハラスメントともいえる問題に対して敏感でない教員の意識が浮き彫りになっているものがあり、一層の意識改革が必要なことが明らかとなった。

- 周囲の学生同士の結婚を見ていると、うまくいかなくなったときに女性の方が研究室を去らなければならなくなっている。男性は 20 代後半で博士課程まで行っていると、ほとんど就職先もないが、女性の場合はその年齢ではまだ派遣などの就職があることもあって、先生も男性に力を入れて指導をしているように見える。（R 修士・20 代）

- 私にも、だんなさんが働いているから、当面は非常勤でつないでいけるね、というような言い方をされたり、いろんなことで忙しくしていると、妻としてちゃんとやっているのかなどという言い方をされる（笑）。去年卒業して子供が産まれた女性がいたが、その方にもいずれ女性は子供を産むからね、と言われたと聞いた。（T 博士課程 4 - 6 年・30 代）
- （指導教員から）事務仕事を押し付けられ、断りにくい状況で今後の研究がうまく進めていけるかどうか不安。研究室の中の女性、その中でも自分に仕事を回してくるので時間的な面からも不安・・・ハラスメント（防止）委員会に相談した方がいいのではないかとアドバイスをもらい、相談した方がいいのかどうか、迷っている。学内のハラスメント（防止）委員会なので、何かの拍子に先生に伝わってしまうのではないかという不安もある（30 代・女）
- （教員も知っている人から受けたセクシュアル・ハラスメントの経験に対して）先生が本当に理解してくれたのか、理解してもらえていないような気がする。自分にも原因があることを自覚していないから。（J 科目履修生・30 代）

また、教員個人の意識の問題以外にも、学内環境をジェンダーの視点で見た場合の問題点が記述されている。中には女性研究者が研究意欲を減退させている状況も伺われ、ここにも学内におけるジェンダー意識改革の必要性が示されている。

- 女性で研究者になって早稲田の教員になっている人もいるが、そういうのが例外状況というふうに見えてしまうのは構造的な問題を抱えていると思う。自分の研究室の先生方は全員男性。その先生方は「早稲田は女性研究者が増えてきている」といわれるが、果たしてそうなのか、印象にとどまっているだけではないのか。男性研究者の意識と女性研究者の意識の乖離がある。院生レベルでも同じだ。（B 修士・20 代）
- 普通の研究者コミュニティは男性ばかり。研究者というくくりで女性が入っていても、どうしても男性の視点で男性主導の言い分が主流のように見える。（B 修士・20 代）
- 母子家庭で、育児と研究を両立していることに対して、「かわいそう」「大変だね」といった固定的な見方をする。・・・皆さんの意識改革などソフトな面を何とかしてほしい。みなと同等に扱ってほしい。（F 博士課程 1 3 年・30 代）

- 男の世界という中に自分ひとりでいることがいづらく疎外感を味わい、そのこともこれから先研究職を選択しないという理由のひとつになっている。(P 博士1 3年・20代)

一方ジェンダーに関する意識改革は、男性にのみ必要なものでなく、女性自身にも必要との指摘があり、一考すべき点といえよう。

- 女性研究者自身もわりと自分をこうだからだめ、子どもがいるから無理という発想に至らないようにしてほしい。・・・そういう意味では女性自身の意識改革をもったら女性研究者自身の可能性も広がる。(F 博士課程1 3年・30代)

このような状況を踏まえて、学内における意識改革のための研修プログラムが必要と思われる。下記は指導教員に対する研修が有効とする意見であるが、このような研修を指導教員に留まらず、全学に広めていくことが重要と思われる。

- 他の専修の大学院生からは、子どもができた時点ではずされてしまう(=呼ばれなくなる。今度研究会をやるというようなときでも、あの人子どもができて大変だからね、と本人に決定させないでこちら側で決定してしまう。)ので産めないというような話は多々聞く。そうなる指導教授の握っているものは大きいので、その先生に対する研修があるといい。自分の指導している院生が子どもができれば必ずこのプログラムを受けなさいというようなものがあつたら非常に有効だと思う。(T 博士課程4-6年・30代)

以上、大学院生が大学に対して求める支援について、学内施設の整備、相談室に求める役割と機能、交流会の実施、出産・育児における制度の整備、育児支援に求められるもの、ジェンダーに関する意識の向上と意識改革の6つの点から整理、考察してきた。

前章では、大学院生が考える「研究者」という言葉が、様々な文脈で、多様な意味において使われていることが示された。したがって、「女性研究者支援」あるいは「研究者支援」という場合、誰を対象に、支援をしていくのかということが非常に重要になってくると思われる。本プランが、大学院生から大学教員までを含めて広く「研究者」とするならば、教員、助手、非常勤講師、ポスドク、大学院生(博士課程・修士課程)の各段階に必要な支援を行うこと、大学院生から大学教員等の研究職に就くに至る長期的な展望のもとにそれがなされる必要があるであろう。

一方、前章で研究者を職業としてとらえ「研究者=大学教員」と考える大学院生が多かったということは、大学院生たちの研究者としてのロールモデルもまた大学教員であるこ

とになる。したがって、大学教員の言動や意識のあらわれが（無意識な振る舞いや言動も含めて）、大学院生に大きな影響を与えることになる。全数調査の自由記述回答からも、指導教員やその他の教職員の何気ない言動によって傷ついたり、不快な思いをした大学院生は少なくなかった。また将来のライフプランや家族形成においても、女性教員が少ないことから、女性特有の悩みを相談する機会が限られてしまうこと、結婚や出産・育児との両立についてイメージできない、あるいはその困難をどのように克服し、両立していくのかという問題や不安に対する情報やアドバイスを受ける機会もほとんどないことから、女性の大学院生が悩みをひとりで抱え込んで苦しむケースや、よりいっそうの不安をかきたてているような傾向もみられた。したがって相談機関を開設し、大学院生に向けての支援を早急に行うことが望まれる。さらに教職員に対する教育研修の機会などを設け、ジェンダーに関して敏感な風土、そして男女を問わず研究と結婚や育児、介護といったライフイベントとの両立を支援する風土を全学的に醸成することが必要と考える。

また、所属研究科を超えた研究者（とりわけ女性研究者）の交流の機会と場の提供に対し多くの要望があり、その必要性和期待の大きさがうかがわれた。相談機関に行くのは気がひける、あるいは敷居が高い、自分の悩みは相談機関にまでいく必要があるのか、といった不安や迷いを持つ人には非常に有効であろう。こうした場やネットワークがあることそれ自体が、相談援助機関の機能や有効性を高めることにつながるであろう。

加えて、大学院生が交流の機会を持つことによって、今回の調査で得られたような声を集約し、大学に研究環境改善に向けての提言を行うことも可能になる。特に本調査においては、学内施設に関して具体的な不満や提案が出された。全数調査での結果と併せて、施設面での改善が求められているといえる。さらに、大学院生が出産した際の学費免除や論文提出期間の延長など産休保護規定等が求められていることが明らかになった。このような施設、制度面における改善を大学が推進することも今後の重要な課題である。

（荻野佳代子・小村由香）

女性研究者支援総合研究所

所長：棚村 政行（法務研究科教授）

研究員：

浅倉 むつ子（法務研究科教授）	石田 眞（法務研究科教授）
円城寺 守（教育・総合科学学術院教授）	片山 博（理工学術院教授）
勝方 恵子（国際教養学術院教授）	加藤 尚志（教育・総合科学学術院教授）
川田 宏之（理工学術院教授）	菊池 馨実（法学学術院教授）
北山 雅昭（教育・総合科学学術院教授）	木村 晶子（教育・総合科学学術院教授）
久保 純子（教育・総合科学学術院教授）	河野 貴美子（文学学術院准教授）
越川 房子（文学学術院教授）	小林 富久子（教育・総合科学学術院教授）
齋藤 美穂（人間科学学術院教授）	坂内 夏子（教育・総合科学学術院准教授）
嶋崎 尚子（文学学術院教授）	島田 陽一（法務研究科教授）
高木 秀雄（教育・総合科学学術院教授）	高松 敦子（理工学術院准教授）
谷口 真美（商学学術院准教授）	多辺 由佳（理工学術院教授）
中村 采女（理工学術院教授）	長谷部 信行（理工学術院教授）
東中川 徹（教育・総合科学学術院教授）	福井 庸子（教育・総合科学学術院助手）
藤野 京子（文学学術院准教授）	古荘 玲子（教育・総合科学学術院助手）
星井 牧子（法学学術院准教授）	村田 晶子（文学学術院教授）
矢口 徹也（教育・総合科学学術院教授）	弓削 尚子（法学学術院准教授）

客員研究員

金 亮完（山梨学院大学法学部専任講師）

客員教員（専任）

荻野 佳代子（客員准教授）	安部 芳絵（客員講師）	榎本 裕子（客員講師）
笹野 悦子（客員講師）	戸邊 恵里（客員講師）	

研究補助員

小村 由香（文学研究科博士課程）

平成18年度文部科学省科学技術振興調整費
女性研究者支援モデル育成事業「研究者養成のための男女平等プラン」成果2006-2

研究者養成のための男女平等プランに関する調査(2)
大学院生の現状とニーズ調査報告書（聞き取り調査編）

2007年5月18日発行

発行 早稲田大学 白井克彦
〒162-0042 東京都新宿区早稲田町 27-7
41-31号館 1F 女性研究者支援総合研究所
電話 03-3203-4610
<http://www.waseda.jp/prj-giwr/>